新富町文化財調査報告書　第 55 集

上薗遺跡（うえぞのいせき）Ⅰ地区（あいちく）

個人農地土壌改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０・２

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会

新富町文化財調査報告書　第 55 集

上薗遺跡 I 地区

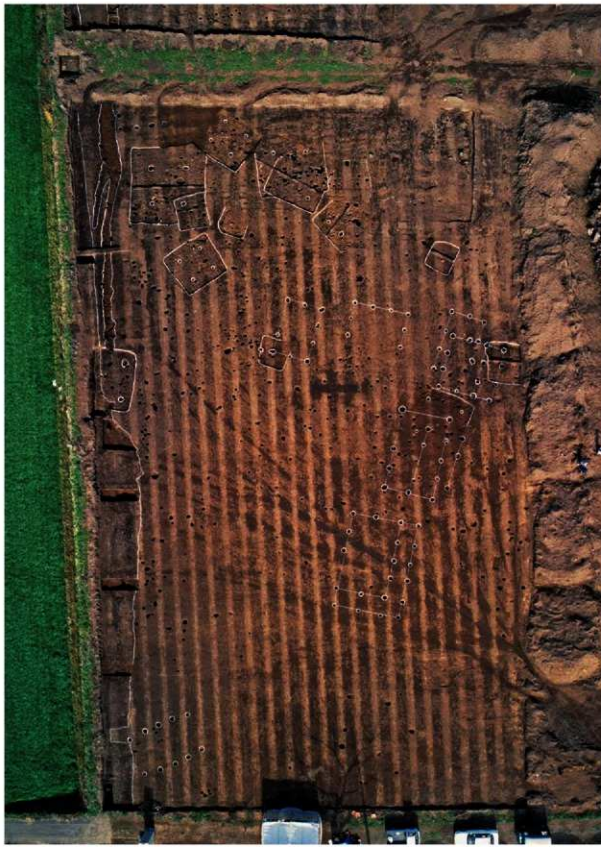
個人農地土壌改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０・２

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会

1. 上薗遺跡全景上空から

1. 上薗遺跡 I 地区北区



1. 上薗遺跡 I 地区南区

1. SA7 と SA8

2. 南区の掘立柱建物群

序　文

新富町は太平洋に面し、九州山地から流れる一ツ瀬川が形成した平野を有しています。この平野から台地上には、旧石器時代から連綿と続く埋蔵文化財があり、上薗遺跡もその一つです。

上薗遺跡はこれまで７回にわたって調査が行われ、古墳時代中期から中世にいたる集落跡が確認されています。検出された住居址は300軒以上を数え、宮崎県内でも最大規模の集落遺跡であります。また、周辺には県指定史跡「富田村古墳」の一群である三納代古墳群や隅ヶ迫横穴墓群が展開しており、集落と墓制との関係を検討するうえで貴重な事例となっております。

今回の調査では30軒の竪穴住居址が確認されました。集落の構造や土器の編年を考えるうえで重要な資料となりそうです。

町ではこれらの資料を、学術研究はもとより広く生涯学習の素材として活用していく考えです。

最後になりましたが、調査に際してお世話になった関係各機関の方々に深く感謝を申し上げます。

平成22年２月

新富町教育委員会
教育長　米良　郁子

例　言

1．本書は平成９年度に宮崎県新富町教育委員会が行った個人農地土壌改良に伴う上薗遺跡Ⅰ地区発掘調査の報告書である。

2．発掘調査及び報告書作成は、国庫補助を適用して行った。

3．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ平板実測にて作成した200分の１測量図を基に作図した。

5．本書で使用する方位は座標北（座標第Ⅱ系）であり、レベルは海抜絶対高である。

6．遺構の土層図と土器等の色調は　新版標準土色帖　に拠った。

7．遺構実測は有馬、小守、松尾、藤本、長友、松永がおこなった。

8．遺構・遺物の写真は有馬、樋渡が行った。

9．整理作業は樋渡、杉尾、甲斐、清、溝口、吉永、沼口で行い。遺物実測及びトレースは樋渡、甲斐、吉永が行った。

10. 本書の編集は樋渡が行った。

11. 本書で使用する遺構略称はそれぞれ、SA=竪穴住居、SD=土坑、SE=溝状遺構、SB=掘立柱建物で示している。

12. 航空写真の撮影は株式会社スカイサーベイに委託した。

13. 出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会生涯学習課に保管してある。

本文目次

第１章　はじめに
第１節　新富町の位置と概要……1
第２節　発掘調査の経緯……1
第３節　報告書作成に至る経緯……1
第４節　調査体制……1

第２章　新富町の地理と歴史
第１節　新富町の地質と地形……4
第２節　新富町の歴史……4

第３章　調査地の位置と周辺の環境
第１節　遺跡の位置とその範囲……7
第２節　周辺遺跡の既往の調査……7

第４章　調査の方法と基本層序
第１節　調査区の設定と調査方法……11
第２節　基本層序……11

第５章　調査の内容
第１節　調査の概要……12
第２節　各遺構の調査の内容……12
1　竪穴住居……12
2　掘立柱建物跡……49
3　土抗……62
4　溝状遺構……66

第６章　考察とまとめ
第１節　上薗遺跡Ⅰ地区遺構と遺物について……80
第２節　上薗遺跡集落の展開について……81
第３節　周辺遺跡との関係について……81
第４節　まとめ……86

挿図目次

図版１　今回の調査区とその周辺遺跡……3
図版２　上薗遺跡周辺の既往の調査……10
図版３　上薗遺跡Ⅰ地区北区遺構配置図……13～14
図版４　上薗遺跡Ⅰ地区南区遺構配置図……15～16
図版５　SA１と出土遺物……17
図版６　SA２……18
図版７　SA２の出土遺物①……19

図版 8　SA 2 の出土遺物② …… 20
図版 9　SA 3 ・ SA 4 …… 22
図版10　SA 3 ・ SA 4 出土遺物 …… 23
図版11　SA 5 と出土遺物 …… 24
図版12　SA 6 と出土遺物 …… 25
図版13　SA 7 ・ SA 8 …… 26
図版14　SA 8 出土遺物 …… 27
図版15　SA 9 と出土遺物 …… 28
図版16　SA10と出土遺物 …… 29
図版17　SA11と出土遺物 …… 30
図版18　SA12と出土遺物① …… 31
図版19　SA12出土遺物② …… 32
図版20　SA13と出土遺物 …… 33
図版21　SA14と出土遺物 …… 34
図版22　SA15と出土遺物 …… 35
図版23　SA16と出土遺物 …… 36
図版24　SA17と出土遺物 …… 37
図版25　SA18と出土遺物 …… 38
図版26　SA19 …… 39
図版27　SA20と出土遺物 …… 40
図版28　SA21と出土遺物 …… 41
図版29　SA22と出土遺物 …… 42
図版30　SA23・SA24 …… 43
図版31　SA23・SA24出土遺物 …… 44
図版32　SA25 …… 45
図版33　SA26と出土遺物・SA27 …… 46
図版34　SA28 …… 47
図版35　SA29 …… 47
図版36　SA30と出土遺物 …… 48
図版37　SB 1 ・ SB 2 …… 50
図版38　SB 3 ・ SB 6 …… 51
図版39　SB 4 ・ SB 5 …… 52
図版40　SB 7 …… 53
図版41　SB 8 …… 54
図版42　SB 9 ・ SB10 …… 55
図版43　SB11 …… 56
図版44　SB12 …… 57
図版45　SB13 …… 58
図版46　SB14 …… 59
図版47　SB15 …… 60
図版48　SB16・SB17 …… 61
図版49　SD 1 ~ SD 7 …… 63
図版50　SD 8 ~ SD10 …… 64

図版51　土抗出土遺物……65
図版52　SE 1 ……67
図版53　SE 1 ・SE 2 出土遺物 ……68
図版54　SE 2 ……69～70

表　目　次

表 1　新富町台地上面の基本層序 ……11
表 2　上薗遺跡Ⅰ地区出土土器観察表 ……68
表 3　上薗遺跡の住居址一覧 ……82
表 4　上薗遺跡既往の調査概要……85

写真図版目次

巻頭図版 1　1．上薗遺跡Ⅰ地区全景上空から
巻頭図版 2　1．上薗遺跡Ⅰ地区北区
巻頭図版 3　1．上薗遺跡Ⅰ地区南区
巻頭図版 4　1．SA 7 とSA 8
　　2．南区の掘立柱建物群
図版 1　1．SA 1
　　2．SA 2
　　3．SA 3
図版 2　1．SA 4
　　2．SA 5
　　3．SA 6
図版 3　1．SA 7
　　2．SA 8
　　3．SA 9
図版 4　1．SA10
　　2．SA11とSD 7
　　3．SA12
図版 5　1．SA14
　　2．SA15
　　3．SA16
図版 6　1．SA18とSA19
　　2．SA20
　　3．SA21
図版 7　1．SA22
　　2．SA23とSA24
　　3．SA26
図版 8　1．SA27とSB11
　　2．SA29とSB 8
　　3．SA30

図版 9　1．SA14埋甕
　　2．SB2
　　3．SB4とSB5
図版10　1．SB6
　　2．SB7
　　3．SB9
図版11　1．SB14
　　2．南区の建物群
　　3．SE2
図版12　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物①
図版13　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物②
図版14　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物③
図版15　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物④
図版16　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑤
図版17　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑥
図版18　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑦
図版19　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑧
図版20　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑨
図版21　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑩
図版22　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑪
図版23　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑫
図版24　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑬
図版25　1．上薗遺跡Ⅰ地区出土遺物⑭

第１章　はじめに

第１節　新富町の位置と概要

新富町は宮崎県中央部の日向灘に位置し、県庁所在地である宮崎市から約20㎞北にある。町の北西部から南東部にかけては一ツ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90mの台地面にかけて町域を有する。町域は南北約７㎞、東西約９㎞、面積61㎢で人口約18,500人の田園都市である。隣接する市町村には西に西都市、北に高鍋町、南に宮崎市がある。主幹産業は酪農や園芸などの農業で、町中央部には航空自衛隊新田原基地があることから「やさいと基地のまち」というイメージが強い。

第２節　発掘調査の経緯

新富町の洪積台地上は、水はけのよい火山灰土壌であることから、茶やさつまいも、たばこなどの栽培が盛んである。

平成９年３月に町内の茶園業者から畑の土壌改良計画が照会された。施行面積は約12,000㎡の畑２枚分で、現在植えてある茶を伐根し水はけをよくするため２m以上掘り返す予定であった。予定地周辺では以前からほ場整備に伴う発掘調査が行われ、古墳時代から中世にかけて300軒以上の住居址が確認されている。今回の施行地にも遺構の範囲が及ぶこと、掘削によって影響があることが明確であったため、町教育委員会では県文化課と協議のうえ、記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

調査は平成９年10月１日から開始し、12月30日に終了した。

第３節　報告書作成にいたる経緯

新富町では昭和50年代以降、各種開発行為に伴う埋蔵文化財の発掘調査が相次いだ。とくに平成以降になると個人農地改良や民間開発に伴う調査が増加した。町教育委員会では、その度に開発者側と調整し発掘調査を行った。そして調査年度内に概要報告書を作成したが、日程及び予算上の都合から本報告書の作成には至らなかった。しかし、埋蔵文化財は発掘調査終了後速やかに本報告書を作成する必要がある。このため県文化財課や文化庁と協議を行い平成19年度から21年度の３ヵ年間にかけて、未刊行報告書作成事業として国庫補助を適用して調査を行った遺跡の本報告書を作成することになった。

未刊行報告書作成事業は今年度で３ヵ年目にあたる。今回は平成９年度に発掘調査を行った上薗遺跡Ⅰ地区の報告書を作成することになった。

第４節　調査体制

各遺跡毎の調査体制は以下のとおりである。

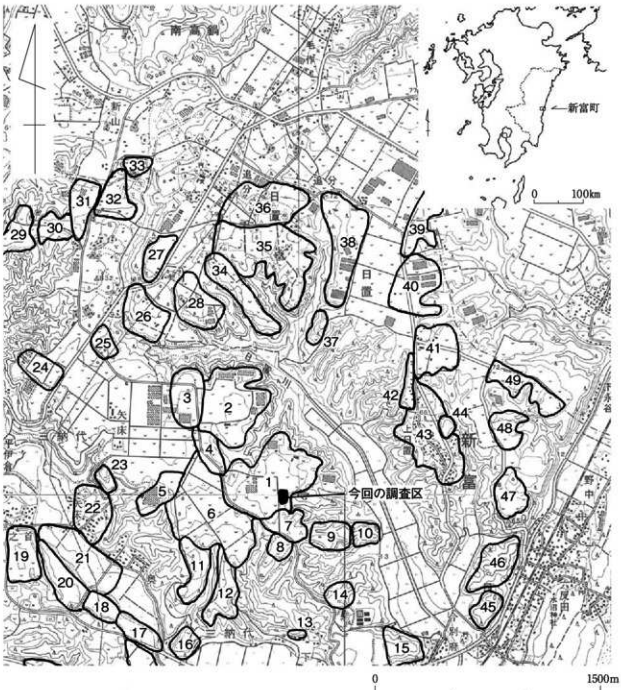
【発掘調査】平成９年度

総　括	清　郁雄（新富町教育委員会　教育長）	
	図師　勉（同　社会教育課　課長）	
	高正　静夫（同　社会教育課長補佐兼社会教育係長）	
庶　務	山崎　和子（同　社会教育課副主幹）	

調査・調整　有馬　義人（同　　社会教育課主事）
参加学生　藤本貴仁　松尾茂樹　長友俊博　松永幸寿
作業員　滝口則雄　滝口恵美子　岩下ヨシ子　野尻富子　日野君代　杉尾美千子
新恵トシ子　大原一彦　日野仁美　小守容子　宝崎忠昌　倉永喜
吉野大　土屋信好　河野隆子　出井クニ　江口栄子　宮ヶ中千穂

【報告書作成】平成21年度
総　　括　米良　郁子（新富町教育委員会　教育長）
後藤　博己（同　　生涯学習課　課長）
金丸　雅弘（同　　生涯学習課　課長補佐）
調査・調整　樋渡将太郎（同　　生涯学習課　主任主事）
調査補助　有馬　義人（同　　生涯学習課　係長）
整理作業員　杉尾美千子　吉永和美　甲斐直美　清美貴子　溝口敦子　沼口未菓

※　平成19年度に社会教育課から生涯学習課へと名称が変更した。



(1) 上園 (2) 東牧 (3) 西牧 (4) 一ツ塚 (5) 北原牧第 1 (6) 蔵園第 1 (7) 木戸口 (8) 通山 (9) 城ヶ尾
(10) 隅ヶ迫横穴墓群 (11) 蔵園第 3 (12) 蔵園第 2 (13) 比良横穴墓群 (14) 太郎兵衛迫 (15) 三納代古墳群鐙支群
(16) 奥 (17) 頭田 (18) 十月田 (19) 地神 (20) 前牟田 (21) 川添 (22) 矢床 (23) 北原牧第 2 (24) 五反丸 (25) 板橋
(26) 西永迫 (27) 毛作第 1 (28) 松ヶ棚 (29) 浦田第 2 (31) 浦田第 1 (32) 中永牟第 1 (33) 中永牟第 3 (34) 小漆
(35) 日置新山 (36) 毛作第 2 (37) 押ヘ松 (38) 鯨ヶ尾 (39) 寅松 (40) 赤松 (41) 原口 (42) 藤掛 (43) 上日置 (44) 上日置城
(45) 越田城 (46) 越田 (47) 小牟田 (48) 東小牟田 (49) 萬福寺上

図版 1　今回の調査区とその周辺遺跡

第２章　新富町の地理と歴史

第１節　新富町の地質と地形

新富町は宮崎平野部の中央よりの沿岸部に位置する。宮崎平野の台地は高度の異なる複数の段丘面から構成されている。本町では北部に洪積台地が拡がり、それぞれ北から茶臼原面（標高約100～120m）、三財原面（標高約80～90m）、新田原面（標高約70m）で構成される。また、鬼付女川や日置川などの小河川が洪積台地の間を流れ、河岸段丘や谷底平野を形成し、南部は九州山地を水源とする一ツ瀬川によって形成された沖積地が拡がる。東部の海岸地帯は、３～４列の砂丘帯とそれに狭まる低所からなる。

第２節　新富町の歴史

(1) 旧石器時代

新富町の旧石器時代の調査は1970年代の大野寅夫氏の精力的な表採作業から始まった。1980年代以降になると瀬戸口遺跡や銀代ヶ迫遺跡、溜水第２遺跡で発掘調査によって旧石器時代の存在が明らかとなり細石刃や細石核、ナイフ型石器などが出土している。

2000年代になると東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われるようになり遺跡数が急増する。とくにＡＴ下位層からの遺物の出土が相次ぎ、本町の人類の歴史が３万年以上前に遡ることが明らかとなった。遺跡の範囲は町内の洪積台地上のほぼ全面に拡がっている。

(2) 縄文時代

縄文時代は発掘調査された遺跡数だけでも40以上に及ぶ。早期と後期、晩期の遺跡が多く、草創期や前期から中期にかけての遺跡は少ない。

【草創期】瀬戸口遺跡で隆起線文土器が出土している。また、東畦原第１遺跡では、石鏃が細石刃などとともに出土している。

【早期】遺跡の数も規模も大きくなる。瀬戸口遺跡をはじめ大規模な集石遺構を伴う場合が多い。向原第１遺跡では炉穴も確認できる。ただし住居址は１軒も確認されていない。遺跡の立地は洪積台地上に多いが、竹淵Ｃ遺跡は標高約11mの河岸段丘上に位置している。出土する土器は貝殻円筒系や押型文土器多く、後半の塞ノ神式や平椏式系の土器はほとんど確認できない。

【前期】遺跡数は激減する。本町では上日置城空堀跡や藤山第２遺跡で轟式の範疇に入ると思われる土器片が出土しているにすぎない。

【中期】現段階では確認できる遺跡はない。

【後期】祇園原遺跡や春日遺跡で竪穴住居址や土器溜りが確認され、長期的な生活の痕跡が伺える。出土する土器は後半期の三万田式以降が中心である。

【晩期】遺跡数は多いが、前半期は皆無で後半の黒川式から刻目突帯文期が多い。蔵園第２遺跡では当該期に相当する住居址が検出されている。県内でも貴重な事例であるといえる。

(3) 弥生時代

【前期】県内を含めて数が少なく、本町も例外ではない。数少ない資料ではあるが、今別府第２遺跡では板付Ⅱ式に相当する壷が採集されている。

【中期】鐙遺跡では２基の竪穴住居址とＶ字溝が確認された。Ｖ字溝は大半が消滅してお

り、調査できたのは10m程に過ぎないため、全体像は判然としないが、環濠と呼べるものではないらしい。住居址からは下城式系の褐型土器などが出土しており、中期でも前半期に該当する。同じような時期の土器は越田遺跡でも出土しているが、鐙遺跡とは日置川を挟んだ北側に位置し、ともに丘陵性台地上に立地する点で共通している。

中期後半以降になると遺跡数は増加する。新田原遺跡、祇園原遺跡、春日遺跡、向原第１遺跡、鬼付女西遺跡、西畦原第１遺跡、八幡上第２遺跡で集落が確認できる。このうち新田原遺跡や八幡上第２遺跡では「花弁状間仕切り住居」と呼ばれる南九州独特の住居址が検出されている。

【後期】後期の遺跡数も多く、中期後半から継続して集落が形成されている場合もある。また、川床遺跡では周溝墓を含む木棺墓や土抗墓など195基が検出され鉄鏃や剣、素環頭太刀など多くの鉄製品が副葬されていた。時期は後期後半から古墳時代前期に相当すると思われ、隣接する祇園原古墳群とともに墓制の推移を検討する上でも重要な遺跡である。

(4) 古墳時代

一ツ瀬川流域から小丸川にかけては、県内でも最大の古墳密集地で、本町も国指定史跡「新田原古墳群」や県指定史跡「富田村古墳」がある。また、横穴墓や地下式横穴といった多様な墓制が混在する地域であり集落遺跡も多い。

【前期】多くの古墳が存在しながら、内容が判明しているものは少ない。それでも各種開発行為に伴う調査や史跡整備、史跡確認に伴う調査によって地道な資料の積み重ねが行われている。

町の区画整理に伴い調査された下屋敷１号墳では勾玉、管玉、ガラス玉、複合口縁壷が出土した。複合口縁壷から前方後円墳集成編年２期に相当すると考えられる。墳形は前方後円形を呈しているが、盛土はほとんどなく、墳端も明瞭ではない。内部主体は木棺直葬と考えられる。このほか山ノ坊30号は、楕円形を呈する後円部平面形と幅狭で低平な前方部といった特徴から前期でも早い時期に比定される可能性がある。また、弁指古墳や塚原３号が墳形などから前期後半から中期初等に比定される可能性がある。集落は八幡上第２遺跡や向原第１遺跡で確認されているが規模は小さい。

【中期】祇園原古墳群で本格的な古墳の築造が開始される。墳長84mの大久保塚古墳は、西都市の女狭穂塚古墳に近似する墳形と埴輪をもっている。鐙古墳では２条鉢巻き状の葺石が巡り、木棺直葬と考えられる内部主体からは、鉄鏃や蛇行剣が出土している。その鐙古墳のすぐ北の丘陵に位置する三納代古墳群太郎兵衛迫支群では、狭い丘陵上に径10～14m前後の円墳が一定間隔をもって築かれていることが判明した。初期群集墳の形成が始まっていた可能性がある。

集落の形成は上薗遺跡で始まっている。上薗遺跡はこの後も中世まで継続して集落が形成され竪穴住居址だけでも300軒以上にのぼる。また、春日遺跡の南部でも中期中～後半にかけての住居址がこれまで15軒確認されている。周辺地形を考慮すると数十から100軒前後の集落が短期間の間に営まれていた可能性が高い。

【後期】祇園原古墳群で墳長70～90m級の前方後円墳と、50m前後の前方後円墳がほぼ同時期に築造されるようになり、宮崎市の下北方古墳群とともに県内最大規模の首長墓系列として評価される。特筆すべきは史跡整備に伴い平成10年度から平成16年度まで調査を行った百足塚古墳であろう。百足塚古墳は２段築成の前方後円墳で、盾形の周溝と周堤をもつ。

埋葬主体は横穴式石室で後円部西側の中腹で入口が確認された。県内最古の横穴式石室である可能性が高い。西側の周堤周辺からは大量の形象埴輪が出土した。出土した形象埴輪の種類には、家、柵、太鼓、大刀、鳥、動物、人物などがあり総数約60個体に及ぶ。さらに墳丘テラスや墳頂平坦面には円筒埴輪や盾形埴輪が確認されている。これらの形象埴輪群は大王墓を除けば西日本最大級といえる。

石船古墳群は前方後円墳３基（うち１基は円墳の可能性がある）、方墳１基で構成されていたが、昭和14年に陸軍の飛行場建設に伴い破壊されることになり、宮崎県から委託を受けた京都大学の梅原末治らが調査を行っている。出土須恵器などからＴＫ43型式併行期から隼上りⅡ～Ⅲ型式併行期にかけて築造された首長墓系列と推定される。

後期群集墳も盛んに築造されている。祇園原遺跡では、平成４年以降ほ場整備や農道整備に伴う調査が行われ、周溝部だけが残存した墳丘消滅墳の検出が相次いだ。現時点で47基にも及ぶ。蔵薗第１遺跡でも昭和62年の調査で、消滅円墳や方墳が確認された。築造時期はＭＴ15型式併行期を端緒に、隼上りⅠ型式併行期まで継続している。

この時期には地下式横穴や横穴墓も築造される。地下式横穴は祇園原遺跡、春日遺跡、蔵薗第１・第２遺跡内で確認され、いずれも群集墳内にある。円墳の周溝内に竪穴を掘削し、墳丘側ないし墳丘外方に墓室を向ける寄生型が多い。横穴墓は台地に深く刻まれた「迫」と呼ばれる所に多く、現在のところ隅ヶ迫、比良、祇園原、銀代ヶ迫、宮ヶ平で確認できる。築造時期は出土した須恵器からＴＫ43型式併行期から隼上りⅢ型式までと推定され、後期群集墳のなかの一墓制として評価できる。

集落は先に挙げた上薗遺跡で集落の形成が続いている。このほか竹淵Ｃ遺跡で、古墳時代中期から終末期にかけての竪穴住居址が22軒確認されている。

⑸ 古代から中世

上薗遺跡は、14世紀頃まで継続した集落で、墨書土器が出土している。

竹淵Ｃ遺跡では、古代～中世にかけての住居址が多数検出され、越州窯系青磁、緑釉陶器さらには県内では珍しい風字硯などが出土している。

祇園原遺跡でも、２軒の竪穴住居跡と多数の土坑が検出され、うち１基からは須恵質の蔵骨器が出土している。蔵骨器はこのほか越馬場遺跡内で13世紀代と思われる常滑焼が出土している。また、平成19年度に調査された栗別府遺跡では蔵骨器埋納土坑と銅製経筒埋納土坑が並列して検出された。蔵骨器は中国製の四耳壺で12世紀後半から13世紀にかけての所産である可能性が高い。

町内には多数の山城も存在する。一ツ瀬川を南にひかえた新田原台地南側の縁辺部や新田原台地から東に派生した舌状丘陵部に多く、このうち上城は伊東48累の一つ「富田城」である可能性が高い。

⑹ 近世

遺跡数は少ない。南原ベニガラ工房跡では、ベニガラ焼成土抗と炭窯状遺構、褐鉄鉱の残滓置場が確認され、ほうろく鍋片や薩摩焼系の小瓶などが出土している。

茶碗窯跡でも４基の窯跡が現存し、磯片などが散在している。

第３章　調査地の位置と周辺の環境

第１節　遺跡の位置とその範囲

町の北東部台地面は東に向かって開けた２本の谷によって開析され、それぞれ南に鬼付女川、北に日置川が流れている。海岸部には南北に続く数列の旧砂丘があるため、２つの河川はこれらを避けて南進して日向灘に流れ入る。南の鬼付女川によって開析された谷は三納代谷、北の日置川によって開析された谷は日置谷と呼んでいる。上園遺跡はこれら２本の谷部を一望できる洪積台地上の標高70m付近に位置する。通称「北原牧台地」と呼ばれているこの台地上および周辺には旧石器から中世にいたる遺跡が数多く確認されている。

第２節　周辺遺跡の既往の調査

上園遺跡周辺には、縄文時代から中世にかけて広範囲に遺跡が展開する。とくに多いのが古墳時代以降で、いずれも上園遺跡との関連性が指摘される。ここでは上園遺跡のこれまでの調査と周辺における既往の調査歴をまとめ、この付近の遺跡の実態を概観する。

１．鎧遺跡１次・２次

民間の造成工事に伴う調査。弥生時代中期前半のV字溝や２軒の竪穴住居、２条鉢巻き状の葺石をもつ円墳を検出した。円墳からは蛇行剣や鉄鏃などが出土しており、古墳時代中期前半から中頃の築造と考えられる。１次調査は昭和55年３月23日から昭和55年３月27日にかけて、２次調査は昭和56年２月13日から昭和56年３月27日まで、町教育委員会が実施。

２．蔵園地下式横穴墓

蔵園第１遺跡内にて地表の陥没によって発見された。左片袖タイプの地下式横穴で副葬品は検出されなかった。昭和59年１月18日から昭和59年１月21日まで、町教育委員会が実施。

３．上園遺跡1次（A・B・C地区）

県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴う調査。上園遺跡の最初の調査で、遺跡の北側にあたる。古墳時代中期から中世にかけての遺構や遺物が出土。検出された遺構は竪穴住居だけで58軒におよぶ。昭和61年11月６日から昭和62年２月24日まで、町教育委員会が実施。

４．上園遺跡２次（D・E・F地区）

県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴う調査。検出された遺構は竪穴住居址だけで200軒以上におよび、上園遺跡の古墳時代集落の中心地であったようだ。昭和62年７月頃から、町教育委員会が調査を実施。

５．蔵園第１遺跡

県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴う調査。墳丘が消滅し周溝のみが遺存している円墳や方墳を検出した。そのなかには二重周溝をもつものもある。出土須恵器からMT

15型式期から築造が始まり、隼上りⅡ型式期まで継続した後期群集墳である。昭和62年10月から12月まで、町教育委員会が実施。

6．蔵園第２遺跡

北原牧台地の南部にあたる。縄文時代晩期の竪穴住居址１軒、弥生時代後期から終末期に該当すると思われる木棺墓や土抗墓９基、古墳時代終末期の地下式横穴墓１基を検出。昭和62年10月から12月まで、町教育委員会が実施。

7．東牧A遺跡

県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴う調査。北原牧台地の北部にあたる。弥生時代後期の竪穴住居址１軒を検出。昭和62年11月に町教育委員会が実施。

8．北原牧遺跡

県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴う調査。台地の西側にあたる。未指定墳３基が調査され、周溝内から須恵器や土師器が検出されている。昭和62年11月に、町教育委員会が実施。

9．上園遺跡３次（G・H区）

県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴う調査。竪穴住居址32軒を検出。昭和63年７月25日から昭和63年９月10日まで、町教育委員会が実施。

10. 東牧B遺跡

県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴う調査。北原牧台地の北側にあたる。縄文時代早期前半に該当する集石遺構を約100基と、弥生時代後期の竪穴住居址１軒を検出した。昭和63年９月12日から平成元年１月31日まで、町教育委員会が実施。

11. 隅ヶ迫横穴墓群1次

土地所有者の土砂採取に伴う調査で発見された。６基の横穴墓が調査され、須恵器のTK43型式から隼上りⅡ型式の時期に築造されたと考えられる。平成２年９月11日から平成２年11月28日まで、町教育委員会が実施。

12. 比良横穴墓群

民間の土砂採取に伴う工事の際に発見された。３基の横穴墓が調査され、須恵器のTK209型式から隼上りⅡ型式の時期に築造されたと考えられる。平成７年８月８日から平成７年９月11日まで、町教育委員会が実施。

13. 上園遺跡4次（Ⅰ地区）

個人農地の土壌改良に伴う調査。平成９年10月１日から平成９年12月30日まで、町教育委員会が実施。

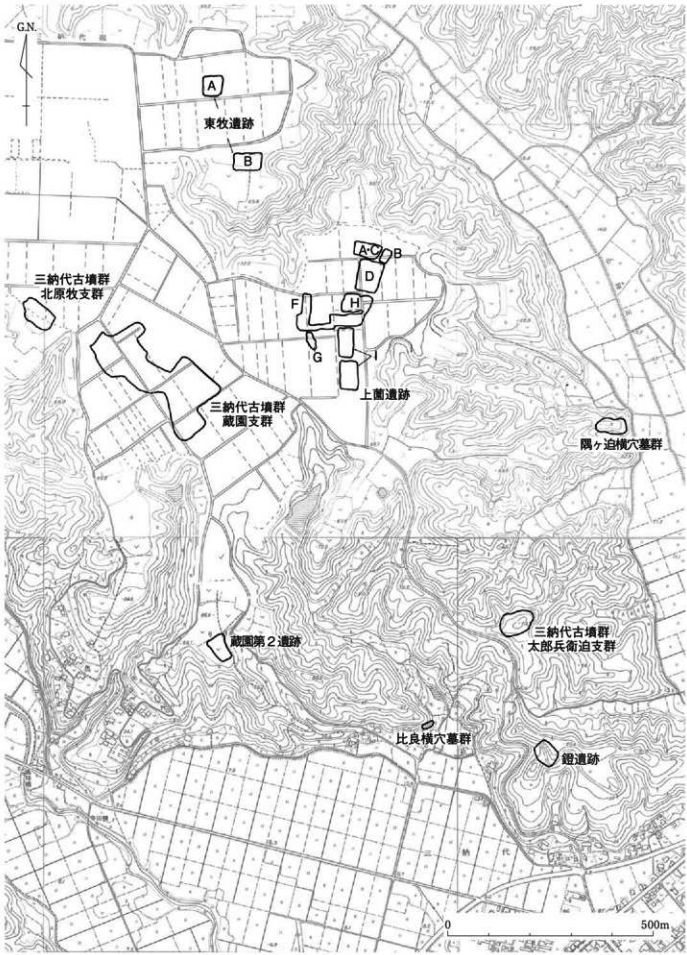
14. 三納代古墳群太郎兵衛迫支群

県指定史跡「富田村古墳」確認に伴って調査された。径10～14mで葺石を伴った円墳９基を確認した。いずれも古墳時代中期築造と考えられる。平成17年１月７日から平成17年３月９日まで、町教育委員会が実施。

15. 隅ヶ迫横穴墓群２次

県指定史跡「富田村古墳」確認に伴って調査された。１次調査時に調査された横穴墓1基と戦時中に掘削された特殊地下壕６基を確認した。平成17年８月１日から平成17年９月22日まで、町教育委員会が実施。

以上、これまでの調査歴についてまとめてきた。上園遺跡周辺には多くの遺跡が存在することが分かる。縄文時代と弥生時代の遺構は台地の縁辺部や、台地から東に派生した丘陵上に点在している。古墳時代になると、中期前半から中頃にかけて上園遺跡で集落の形成が始まる。それに呼応する形で、台地東側の丘陵上に三納代古墳群の鐙支群や、太郎兵衛迫支群で古墳の築造が始まったようだ。そして後期になると台地上に蔵園支群や北原牧支群、あるいは隅ヶ迫横穴墓群や比良横穴墓群といった後期群集墳が形成される。このように上園遺跡は集落と古墳との関係を考えるうえで重要な遺跡であるといえる。



図版２　上薗遺跡周辺の既往の調査

第４章　調査の方法と基本層序

第１節 調査区の設定と調査方法

今回の調査区は上園遺跡の南部にあたる。以前の調査区から数えて９番目にあたることから「上園遺跡Ⅰ地区」とした。調査区は南北に長く、中央には東西にわたって作業道がある。この道を挟んだそれぞれの調査区を北区、南区と呼称し、バックホーで茶の伐根と表土の除去を同時に行った。その結果、調査区東側は既に１ｍ以上深掘されており、調査対象区から除去して土置き場にした。また、それ以外の区域もアカホヤ面は既に削平され、特に北区南側では遺構の依存状況が極めて悪かった

表土を除去したのち作業道を中心とし、調査区全体に９ｍ単位のグリッドを設定した。その後遺構精査を行い、遺構が検出されたら石灰でマーキングを行った。

遺構は１／20縮尺で実測し、図面を作成した。写真は中判カメラで撮影し、35㎜カメラで補助した。調査区の全景は株式会社スカイサーベイに撮影を委託した。

第２節　基本層序

表１は新富町周辺の台地上の基本土層である。本町では宮崎層群の妻相を基盤に、台地上では複数のテフラやローム層あるいは南九州独特の黒色土層が堆積している。今回の調査では喜界アカホヤを基準に表土剥ぎを行い、遺構検出を行う予定であったが、上部の削平が激しく、喜界アカホヤの残存状態が極めて悪かった。このため、№６の黒褐色ロームや№７の暗褐色ロームで遺構検出を行った。

表１　新富町台地上面の基本層序

№	略　称	層　名	年　代	備　　考
1		表土		
2	クロボク	黒色土		
3	Kr－Ｔ	高原スコリヤ	AD1235	遺構埋土中に含まれることがある
4	クロボク			縄文時代前期以降の遺物包含層
5	k－Ａh	喜界アカホヤ	6.5ka	
6	MBO	黒褐色ローム		
7		暗褐色ローム		
8	ML１	桜島薩摩	11ka	
9		褐色ローム		

第５章　調査の内容

第１節　調査の概要

工事施工面積12,000㎡のうち、調査対象となったのは6,000㎡である。検出された遺構は竪穴住居址30、掘立柱建物17、ピット1,700　土抗10、溝２で、北側に遺構が密集し、南側が閑散としているため、今回の調査区が上園遺跡の南端に近いことが分かる。また、喜界アカホヤ面まで削平されているため、遺構の残存状態も悪く、竪穴住居のほとんどが壁面の立ち上がりが０～20cm程しか残っておらず、プランが明瞭でない。なかには埋甕や主柱穴のみしか検出されなかったものもある。このため出土遺物も従来の調査に比べて少なかった。

掘立柱建物は古代と中世の時期に分かれ、北区北側に古代のものが集中している。古代のものが掘方も大きく規則正しい配置になっている。

第２節　各遺構の調査の内容

１．竪穴住居

検出できた竪穴住居は30軒である。内訳は古墳時代15、古代以降が３である。古墳時代のものは主柱穴が４本で、規模が大きい傾向にある。竪穴住居は南区の南側では確認されていないことから、今回の調査区が集落の南端であったようだ。

①ＳＡ１

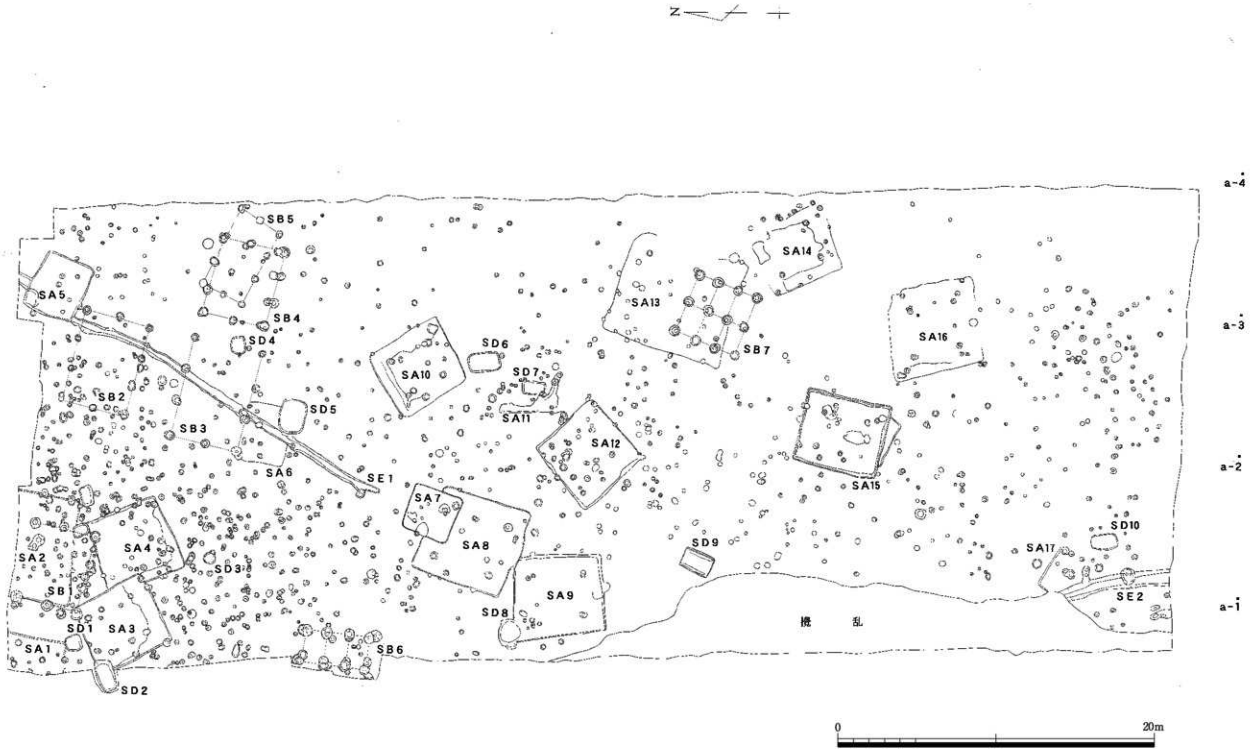
北区の北側で検出された。調査範囲の制約で、北側と西側が未検出のため、全体のプランは不明。検出面からの深さは最大で36cmを測る。主柱穴も判然としない。

１～３は土師器甕である。１と３は頸部の屈曲が不明瞭で、胴部径が口径を上回る。内外面ともナデ調整を施し、３は板ナデが施される。２は頸部がくの字状に屈曲する。外面胴部にはタタキが施される。４と５は土師器の小型甕である。４は口縁部が短く外傾しながら立ち上がる。外面はミガキ、内面はナデが施される。５は胴部片で肩部が張らずなだらかに底部へと至る。内外面とも板ナデが施される。６は土師器の杯で頸部でゆるやかに屈曲し、口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。内外面ともナデ調整。７と８は土師器高坏の脚部である。柱状化している。ともに外面はミガキ、内面はナデが施される。９は土師器の底部で尖底を呈する。

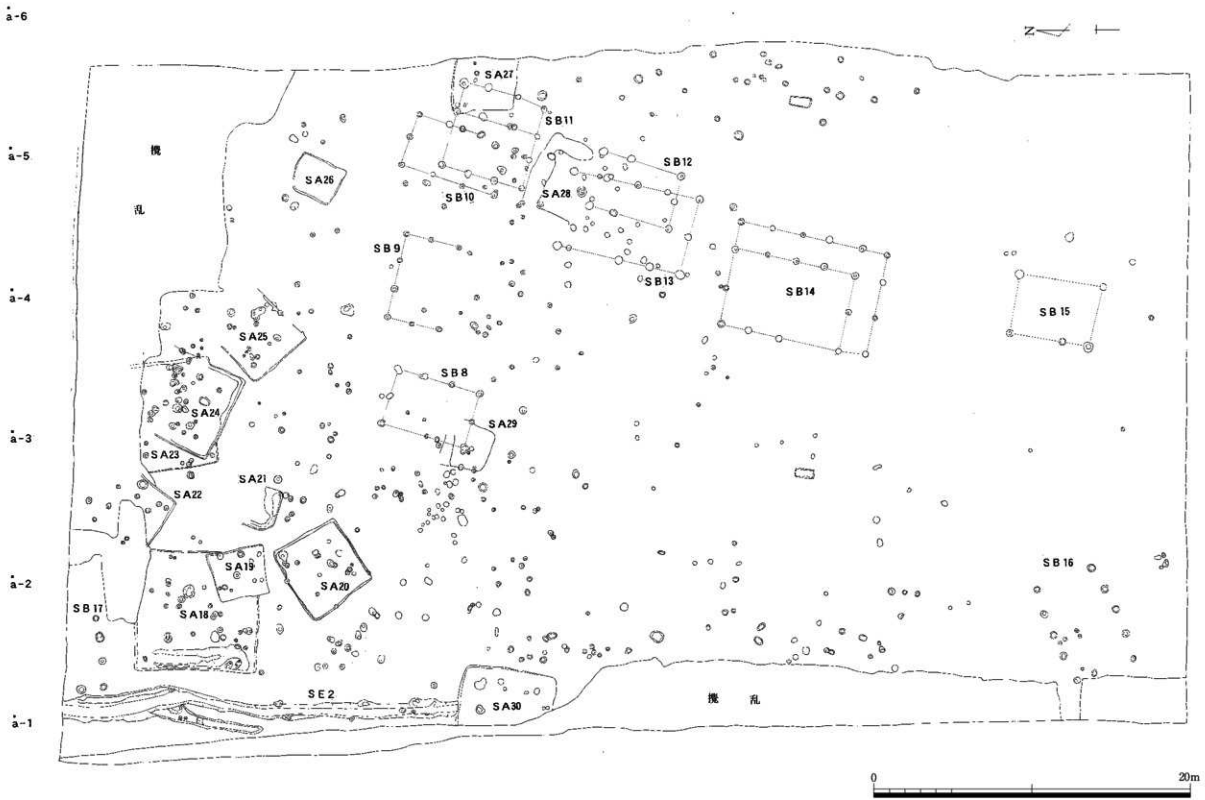
②ＳＡ２

北区の北側で検出された。調査範囲の制約で北側が未検出となっているが、一辺6.8m程のプランと推定される。ＳＢ１の柱穴が絡んでいるが、住居に伴う柱穴が２本検出されており、全体のバランスから４本と思われる。検出面からの深さは最大で24cmである。

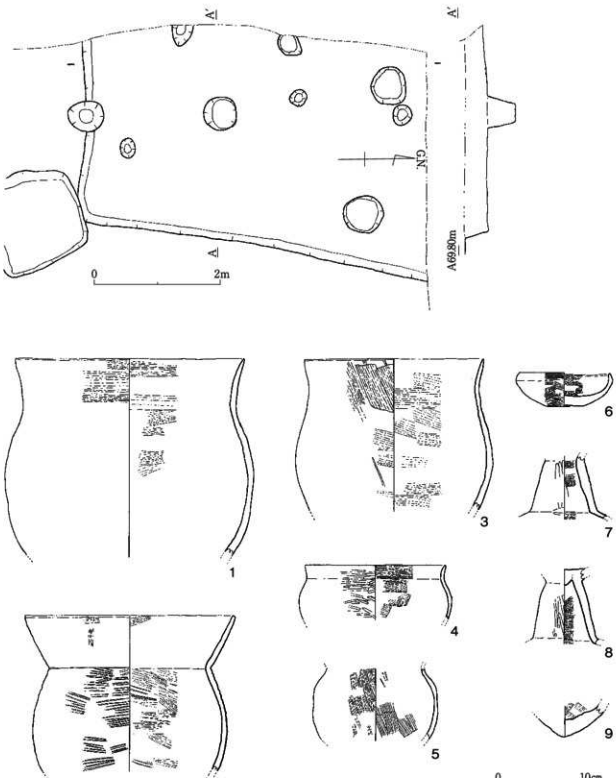
10～16は土師器甕。頸部はゆるやかに屈曲し、口縁端部は外反する。胴部は長胴。内外面ともナデで一部板ナデ。11は頸部が屈曲し口縁部は外傾しながら立ち上がる。口縁端部は鋭くおさめる。胴部は球体。内外面ともナデで一部板ナデ。12は頸部が屈曲し口縁部は外傾しながら立ち上がる。内外面ともナデで一部板ナデ。13は頸部との境の稜線がやや不明



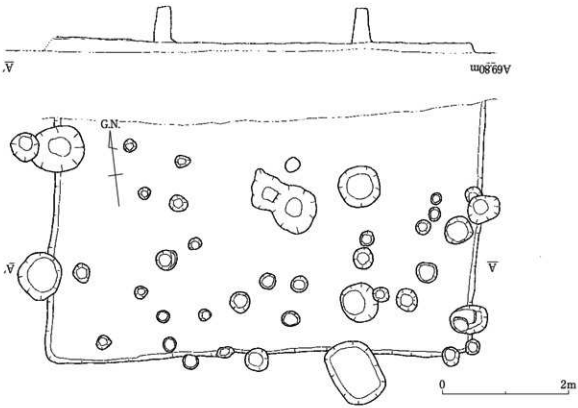
図版３　上園遺跡Ⅰ地区北区遺構配置図



図版4　上園遺跡Ⅰ地区南区遺構配置図

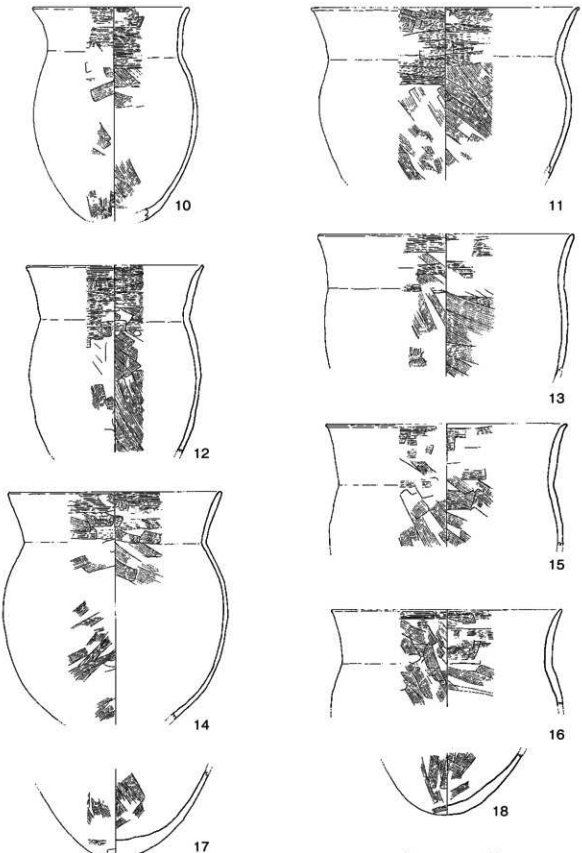


図版5　SA1と出土遺物

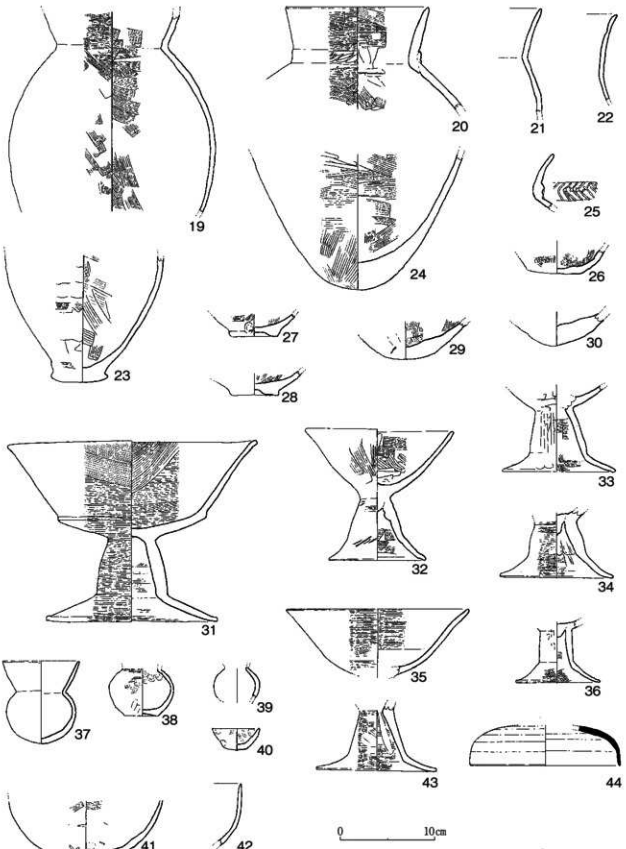


図版6　SA2

瞭。口縁部は外傾、外反しながら立ち上がる。内外面ともナデで一部ヘラナデ。14は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。胴部は球体。内外面ともナデで一部板ナデ。15は頸部が屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。口縁端部は鋭くおさめる。内外面ともナデ。16は頸部がゆるく屈曲、稜線もやや不明瞭。内外面ともナデ。17と18は土師器の底部。ともに丸底を呈し、内外面ともナデを施す。19は土師器壷。頸部はくの字状に強く屈曲し口縁部は外傾しながら立ち上がる。胴部は長胴。内外面ともナデ一部板ナデ。20は土師器壷。頸部に斜めの沈線を施した突帯を張り付ける。頸部はくの字状に強く屈曲。内外面ともナデ。21と22は土師器の口縁部。21はくの字状に屈曲。22は屈曲がゆるい。ともに口縁部は外傾しながら立ち上がる。23は土師器の底部。器種は不明。底部は平底で端部が張り出す。内外面ともナデ。24は土師器の胴部～底部片。丸底を呈す。外面はハケメとヘラナデ。内面は板ナデ。25は土師器壷の頸部片。斜め沈線を施した突帯を貼り付ける。口縁部は外傾しながら立ち上がる。26～30は土師器の底部。26は平底で内外面とも指ナデ。27と28は上げ底を呈する。内外面ともナデ。29と30は丸底を呈する。29は内外面ともナデ。30は摩滅激しい。31～36、43は土師器高坏。31はほぼ完形品で、口縁部と受け部の境が強く屈曲。脚部はエンタシス状を呈し、裾部は直線状に開く。内外面ともナデ。内面の一部ミガキ。32は口縁部と受け部の境が不明瞭。脚部はハの字状に開き、裾部がわずかに屈曲する。外面はナデ、内面はミガキと板ナデ。33は脚部。エンタシス状を呈する。外面はミガキとナデ。内面はナデ。34は脚部。内外面ともナデ。内面は指ナデ。35は口縁部。受け部との境が若干屈曲する。口縁端部はやや外反しながら立ち上がる。内外面ともナデ。36は脚部。柱状化している。内外面ともナデ。43は脚部。柱状を呈す。内外面ともナデ、一部指ナデ。37は土師器小型壷。頸部はくの字状に強く屈曲。胴部は球体



図版7　SA2出土遺物①



図版 8　SA 2 出土遺物②

で丸底を呈す。摩滅激しい。38は土師器小型壷の胴部～底部片。胴部は球体。底部は上げ底を呈する。外面はナデのちミガキ、内面は指ナデ。39は土師器小型壷の胴部で球体を呈する。摩滅激しい。40は土師器小型鉢。手づくねで作られる。41は土師器杯の胴部～底部。丸底を呈す。外面はナデとヘラナデ。内面はナデと指オサエ。42は土師器杯の口縁～胴部。口縁部は直立して立ち上がり、端部は鋭くおさめる。44は須恵器蓋杯。天井部からなだらかに傾斜し口縁部へ至る。外面の回転ヘラケズリは全体の1/2。

③SA3

SA4とSD2とで切り合っている。埋土の状況などからSA4、SA3、SD2の順で構築されたと考えられる。一辺4.7～4.8mの方形に近いプランで、検出面からの深さは最大で30cmを測る。西側および南側に壁帯溝と思われる堀方が認められるが、全周はしていなかったようだ。

45と46は土師器甕で頸部の稜線がはっきりせず、口縁部は外反しながら立ち上がる。内外面とも工具ナデを施し、45の胴部下面はヘラナデが施される。47は脚台付鉢である。内外面とも指ナデと指オサエが施される。48は土師器壷で口縁部は強く屈曲して短く外傾しながら立ち上がる。内外面とも板ナデが施される。49と52～54は土師器の杯である。52と53は口縁端部が内傾しながら立ち上がる。49は内外面ともミガキを施し、ほかはナデが主体となる。50は土師器高坏の脚部で柱状化している。51は土師器の小型鉢で手づくねによって作られている。55～56は土師器の底部で、56は上げ底を呈し、55・57は丸底を呈す。ともに内外面ともナデ調整。

④SA4

SA3によって北西側の一部を切られている。一辺が4.8～5mの方形に近いプランである。検出面からの深さが最大で18cmで、貼床面が一部掘削されており凹凸が激しい。中央のやや東寄りから埋甕が検出され、周辺は熱のため赤化している。多くの柱穴が絡んでいるが、住居に伴う主柱は確認できなかった。

58は土師器甕である。頸部は屈曲し口縁部は外傾しながら立ち上がる。胴部は長胴で底部は丸底を呈す。外面は摩滅し内面はナデ調整。59は土師器杯で、口縁部は屈曲せずに直立気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整。60は須恵器蓋杯で、口縁部と体部との境に凹線を設け、明確に区別される。外面の回転ヘラケズリは全体の1/2に及ぶ。

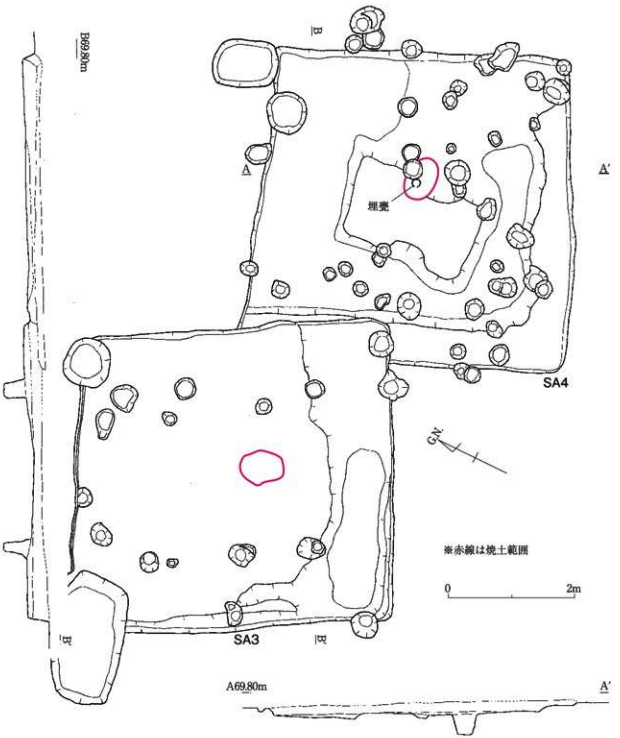
⑤SA5

調査区の北側でSE1を切った状態で検出された。一辺が3.5～3.9mのプランで、検出面からの深さは最大で20cmである。北側の隅に不定形の土坑がある。主柱穴は確認できなかった。

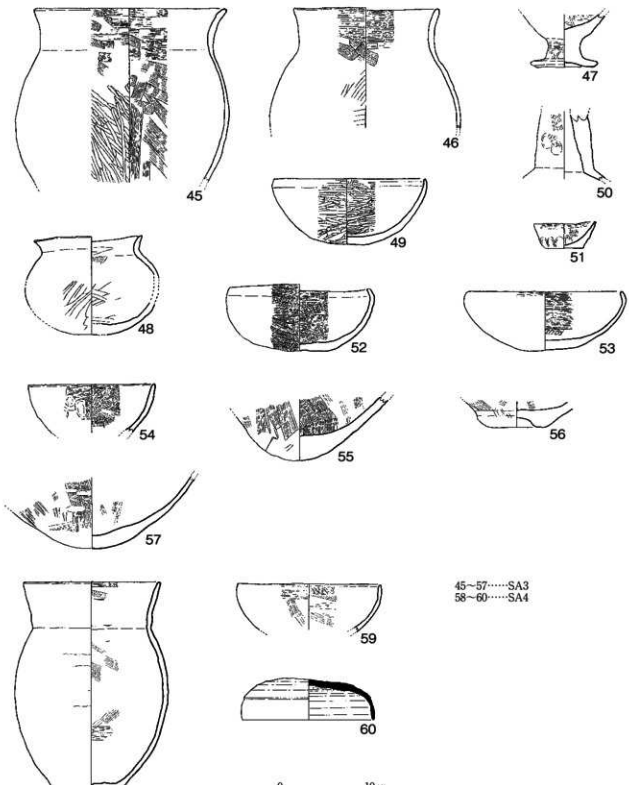
61は土師器皿で底面はヘラオコシ。62と63は土師器椀で62は底面に糸切り痕が残る。64～66は土師器の底部でおそらく椀だろう。いずれもヘラオコシ。

⑥SA6

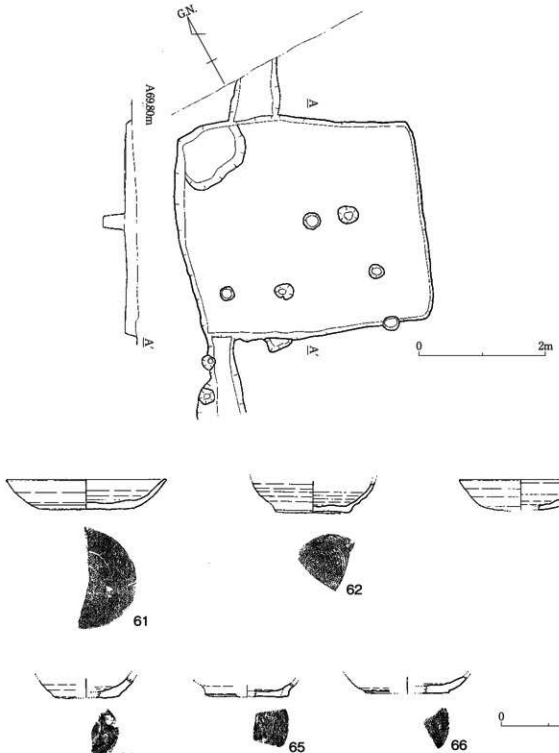
SE1とSD5によって切られている。一辺が3.5～3.9mのプランで検出面からの深さは



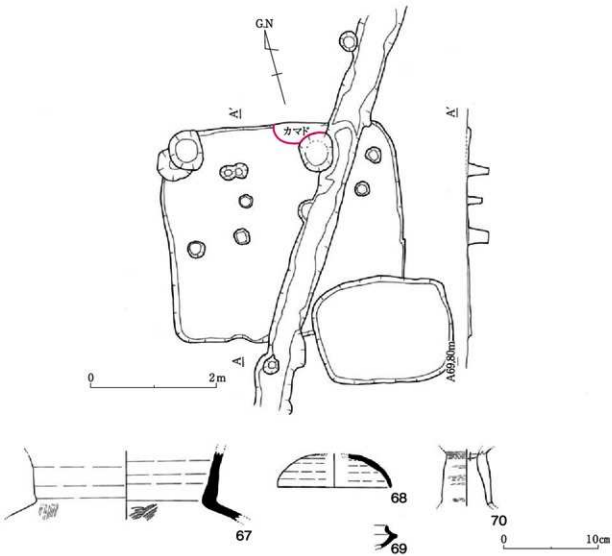
図版9　SA3・SA4



図版10　SA３・SA４出土遺物



図版11　SA5と出土遺物



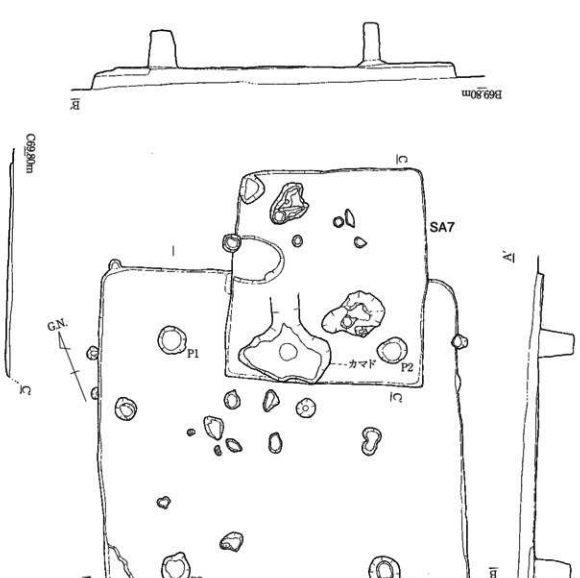
図版12　SA６と出土遺物

最大で６㎝に過ぎない。北側の壁沿いに竈の痕跡が認められる。主柱穴は確認できなかった。

67は須恵器甕で頸部は強く屈曲し、口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。68は須恵器蓋杯で、天井部からなだらかに口縁へと至る。回転ヘラケズリは全体の１/５程度である。69は須恵器坏身の口縁部で、受け部から短く強く内傾し口縁へと至り、口縁端部を鋭くおさめる。70は土師器の高坏の脚部である。柱状を呈す。

⑦SA７

SA８を切った状態で検出された。一辺が3.1～3.3mのプランで検出面からの深さは最大で６㎝に過ぎない。南側には竈が付設され、焚口部には深さ数㎝程度の堀方が認められる。西壁中央部には張り出しがあるが用途は不明。主柱穴は確認できなかった。

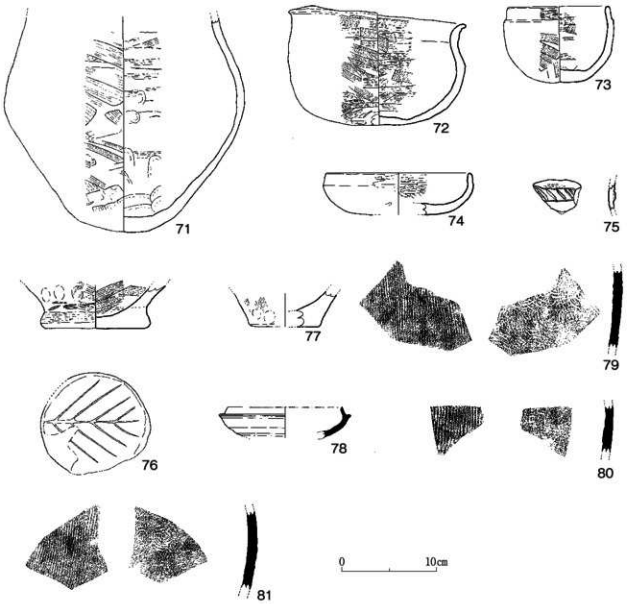


図版13　SA７・SA８

⑧SA８

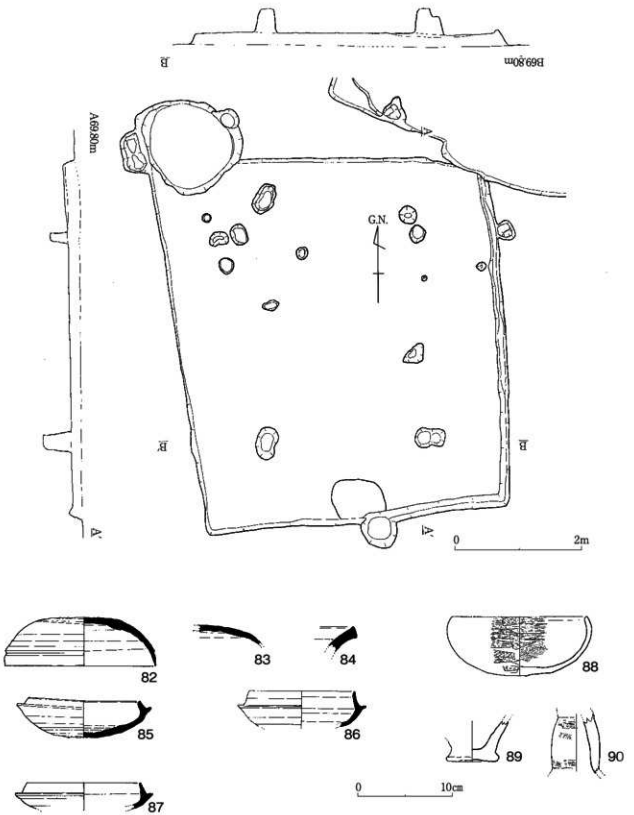
北側の一部をSA７に切られている。一辺が5.8mの方形プランで、検出面からの深さは最大で30cmを測る。主柱穴は４本検出された。

71は土師器甕で埋甕として使用されていた。底部は平底を呈している。内外面とも工具ナデを施し、内面の一部は指ナデを施す。72は土師器小型甕で口縁部は短く外反しながら立ち上がる。内外面ともナデ。73は土師器鉢で、口縁部と胴部との境に段を設けている。内外面ともナデ。74は土師器杯で口縁端部がわずかに屈曲して内傾しながら立ち上がる。

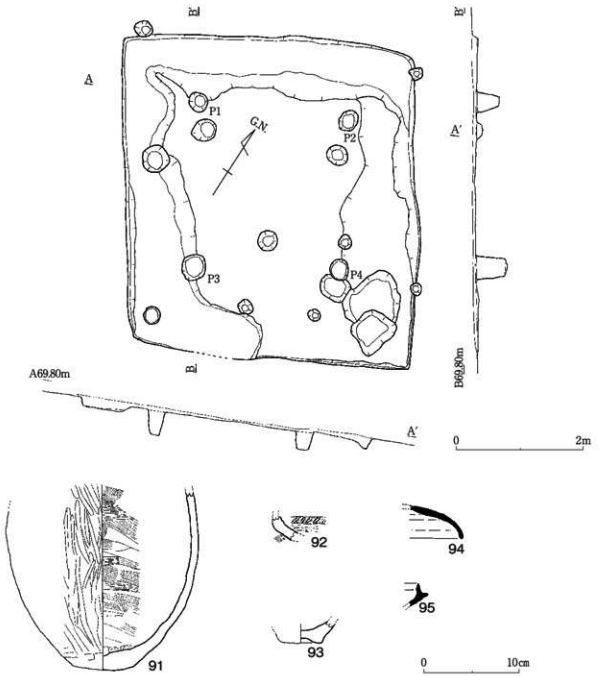


図版14　SA 8 出土遺物

内外面ともミガキ。75は土師器壷の頸部片で、斜めの沈線を施した突帯を貼り付けている。76は底部片で、端部が張り出し底面には木の葉痕が残る。弥生土器の可能性がある。77は土師器の底部で平底を呈する。78は須恵器の杯身である。口縁端部は内傾しながら立ち上がる。外面の回転ヘラケズリは全体の 1 / 4 である。79 ~ 81は須恵器の胴部片で79と81は外面に平行タタキ、82は格子タタキを施す。ともに内面には同心円状の当て具痕を残す。



図版15　SA9と出土遺物

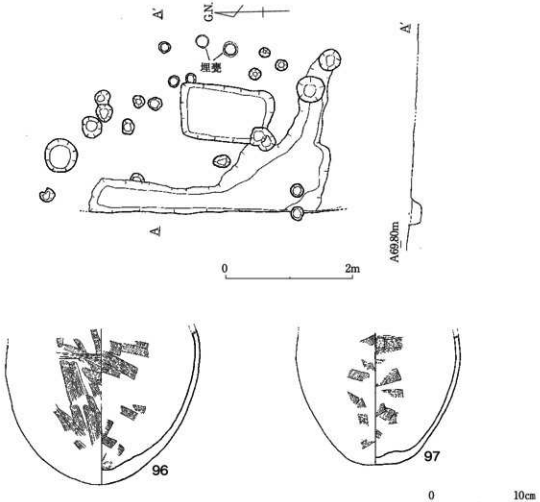


図版16　SA10と出土遺物

⑨SA9

北西側の一部をSD8によって切られている。一辺が4.8～6.1mで西壁が長くややいびつなプランである。検出面からの深さは最大15cmである。西壁と南壁の一部に壁帯溝が認められるが全周はしていなかったようだ。主柱穴は4本である。

82は須恵器蓋杯で口縁部と体部との境に沈線を設け、口縁端部は鋭くおさめる。外面の回転ヘラケズリは1/6程度である。83も須恵器蓋杯の天井部片。85～87は須恵器の杯身である。85は口縁部が短く内傾して立ち上がる。86と87は口縁部がゆるやかに内傾して立



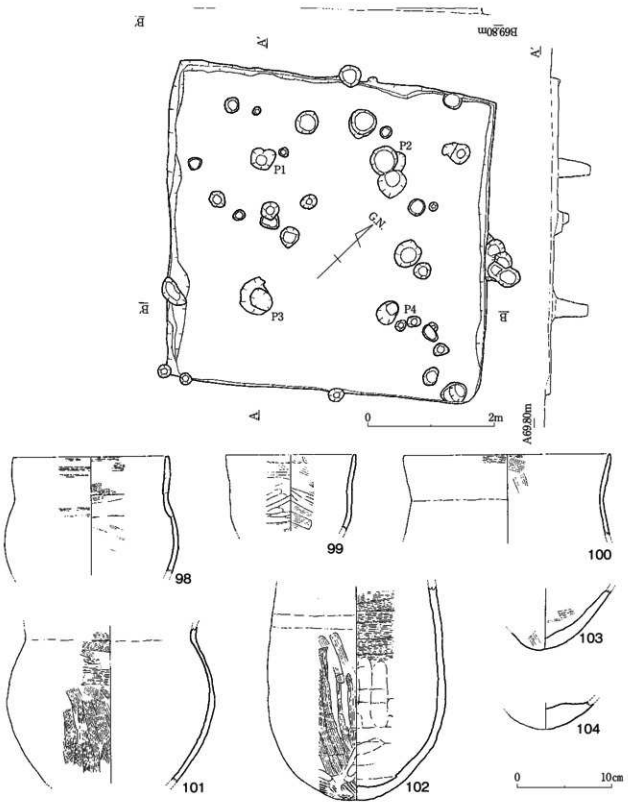
図版17　SA11と出土遺物

ち上がる。88は土師器杯で、口縁端部が内傾して立ち上がる。内外面ともナデ。89は土師器の底部で平底を呈し端部が張り出す。90は土師器高坏の脚部で、中央部がエンタシス状に張り出す。外面はナデ。内面は不明瞭。

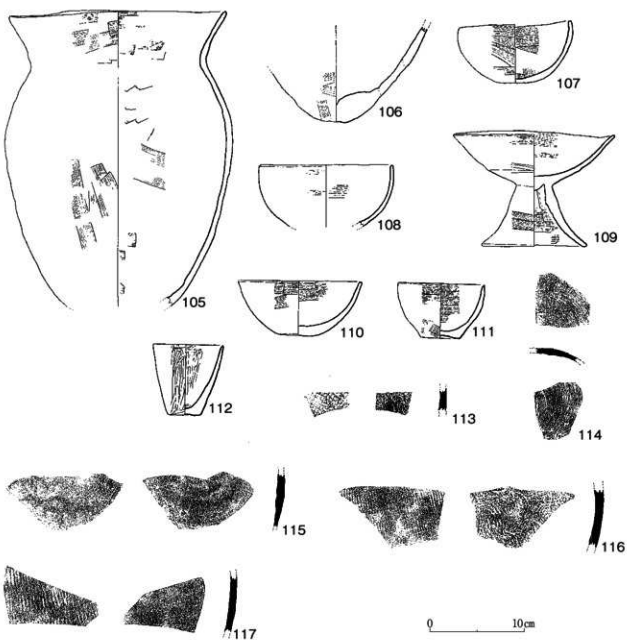
⑩SA10

一辺4.6～4.8mの方形に近いプランである。検出面からの深さは最大で15㎝に過ぎず、貼床面まで掘削されている。一部に壁帯溝が認められるが全周しているかどうかは判然としない。中央には埋甕が付設され周辺は熱のため赤化している。柱穴は４本確認されている。

91は土師器甕で埋甕として使用されている。胴部は長胴で底部は平底を呈す。外面はヘラナデ。内面も工具ナデだろう。92は土師器壺の頸部片で斜めの沈線を施した突帯を貼り付けている。93は土師器の底部で上げ底を呈す。94は須恵器坏蓋で天井部からなだらかに傾斜し口縁部へと至る。95は須恵器坏身の口縁部片で、口縁端部は短くゆるく内傾しながら立ち上がる。



図版18　SA12と出土遺物①



図版19　SA12と出土遺物②

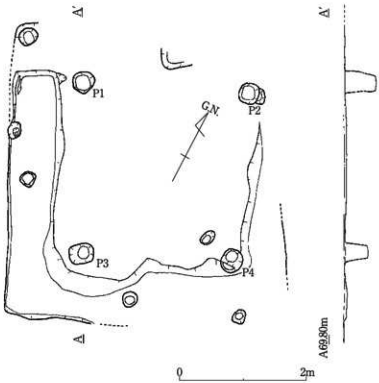
⑪SA11

2基の埋甕が検出されたことにより住居と確認された。壁は西側にわずかに確認できる程度で、全体のプランや主柱穴は不明である。SD7が絡んでいるが、住居とは時期差がある可能性が高い。埋甕は25cmの間隔をおいて南北に並んで検出された。

96と97は土師器甕でともに埋甕として使用されていた。96は丸底、97は平底を呈する。ともに内外面ともナデ。

⑫SA12

一辺が4.9～5mの方形プランで、検出面からの深さは最大で12cmに過ぎない。南東側をのぞく3つの壁沿いから壁帯溝が検出されている。主柱穴は4本である。

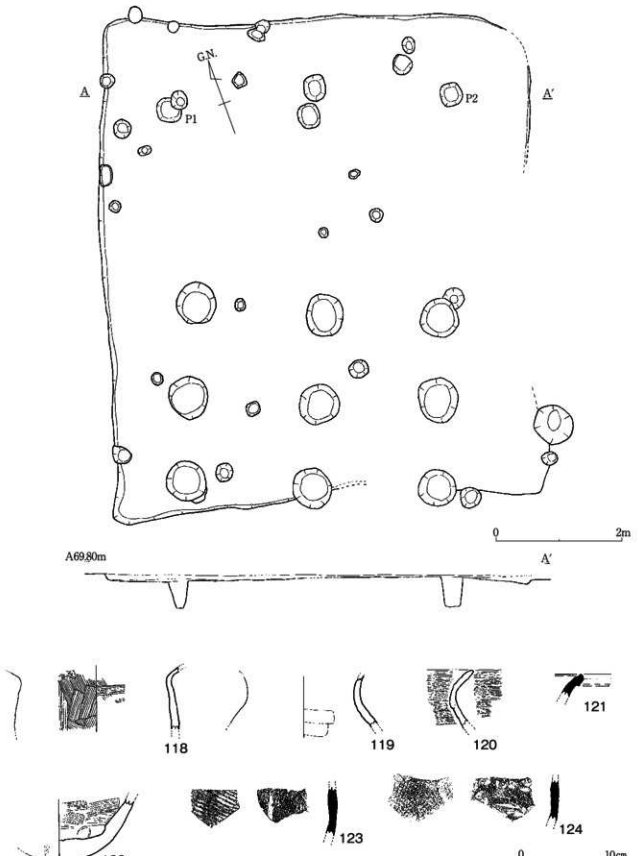


図版20　SA13と出土遺物

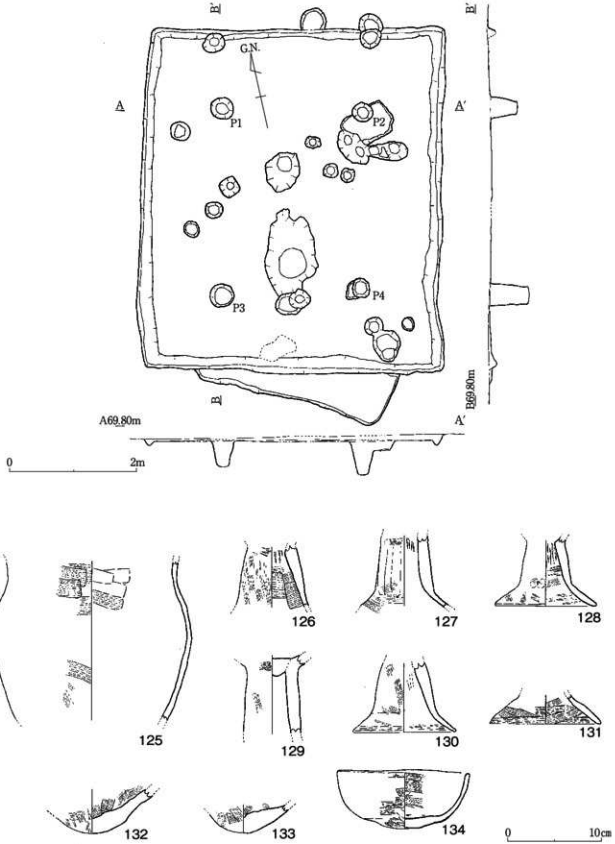
98～102、105は土師器甕である。このうち102は埋甕として使用されていた。98は頸部の稜線がはっきりせず、口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面ともナデ。99は頸部の稜線がはっきりせず、口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。内外面ともナデ。100は頸部がゆるく屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。摩滅激しいが内外面ともナデだろう。101は胴部片で球形を呈す。外面には板ナデを施す。内面は摩滅。102は胴部～底部片で著しく長胴化し、底部は丸底を呈す。内外面ともヘラ状の工具ナデと指ナデを施す。105は頸部がくの字状に屈曲する。胴部はやや長胴である。内外面ともナデ。103と104、106は土師器の底部片。103と104は丸底を呈し、106は平底をわずかに残す。107と108、110は土師器杯。107は口縁端部がわずかに内傾する。108はほぼ直立。110は外傾しながら立ち上がる。ともにナデ調整だが108の内面は特に丁寧に仕上げる。109は土師器高坏。口縁部と受け部の境がわずかに屈曲する。脚部は八の字状に開く。内外面ともナデ。111は土師器鉢。やや上げ底気味になる。内外面ともナデ。112は土師器の小型鉢。平底を呈し、そのまま外傾しながら口縁部へと至る。113は須恵器片で外面は格子タタキを施す。内面は不明。114は須恵器蓋杯の天井部片。115は提瓶の胴部片か。116と117は須恵器片でともに外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕。117は一部ナデ消している。

⑬SA13

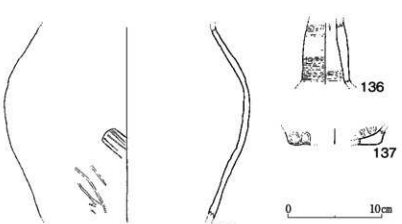
SB７の柱穴が一部絡んでいる。6.9～7.8mのプランと推定され、南側ほど残存状態は悪い。検出面からの深さは最大で10cmに過ぎない。北側で住居に伴う柱穴を２本検出したが、南側ではSB７に切られているためか検出されていない。全体のバランスから4本柱と推定



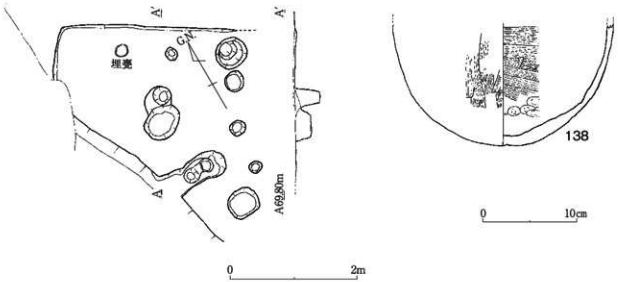
図版21　SA14と出土遺物



図版22　SA15と出土遺物



図版23　SA16と出土遺物



図版24　SA17と出土遺物

される。

118は土師器甕の胴部片。やや長胴化。内外面ともハケメとナデ。119は土師器壷の頸部か。ゆるやかに屈曲する。外面は摩滅。内面は板ナデ。120は土師器甕の口縁部。頸部で屈曲し外傾しながら立ち上がる。内外面ともナデ。122は土師器の底部。わずかに平底を残す。外面は摩滅。内面はナデ。121は須恵器壷の口縁部片。端部が肥厚する。123と124は須恵器の胴部片。123は外面平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。124は格子タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。

⑭SA14

残存状態が悪く、西壁の一部しか検出されていないが、一辺が4.3～4.6mのプランと推定される。4本の柱穴が検出されている。

⑮SA15

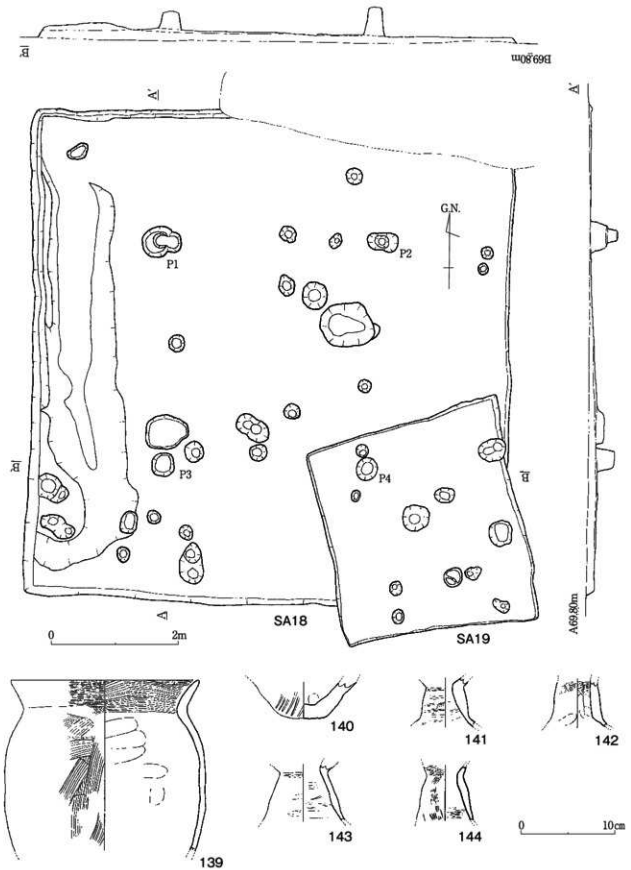
一辺4.8～5.4mのプランで、検出面からの深さは最大で12cmと残存状態はよくない。壁帯溝が全周している。主柱穴は4本である。

125は土師器甕の頸部～胴部片。頸部の屈曲はゆるく、胴部は長胴。内外面とも板ナデ。

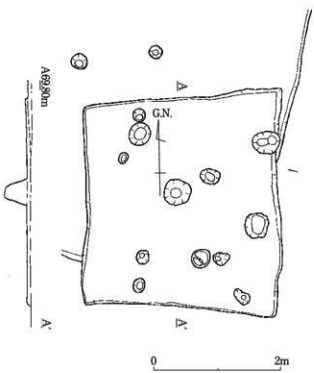
126～130は土師器高坏の脚部である。ともに柱状化している。ナデ調整が主体だが、126は内面に板ケズリを施す。131は土師器高坏の裾部である。内外面とも丁寧なナデ。132と133は土師器の底部。ともに丸底を呈す。132は内外面ともヘラナデ。133はナデを施す。134は土師器杯で、底部は平底を呈し、口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。

⑯SA16

一辺が5.5～5.7mの方形に近いプランだが、南側の残存状態はよくない。一部は貼床面まで掘削が及んでいる。西壁には壁帯溝が認められるが全周していなかった可能性が高い。主柱穴は4本である。



図版25　SA18と出土遺物



図版26　SA19

135は土師器甕の胴部片でやや長胴。摩滅激しいが外面の一部に板ナデの痕跡残る。13は土師器高坏の脚部。エンタシス状に膨らみをもつ。内外面ともナデ。137は土師器の底部で平底を呈す。内外面とも指オサエ。

⑰SA17

攪乱とSE２によって北東壁以外はほとんど失っており残存状態は悪く、プランは不明である。住居に伴う柱穴も確認できない。北東側の壁に近い位置で埋甕が検出されている。

138は土師器甕の底部で埋甕として使用されていた。丸底を呈し、内外面とも板ナデ、内面の底部付近に指オサエを施す。

⑱SA18

北側の一部を攪乱され、南東側ではSA19によって切られている。一辺が7.6～7.8mの方形に近いプランで、今回の調査では最大規模をほこる。検出面からの深さは最大で24cmである。北壁と西壁には壁帯溝が認められるが全周はしていない。住居に伴う柱穴は４本である。

139は土師器甕で、頸部は屈曲し口縁部は短く外傾しながら立ち上がる。内外面ともナデ。外面胴部にはハケメ。140は土師器の底部で平底を呈す。外面はタタキとナデ、内面はナデ。141～144は土師器高坏の脚部。141と144はエンタシス状にわずかに膨らみをもつ。142は柱状化。143は八の字状に開く。ともにナデ調整。

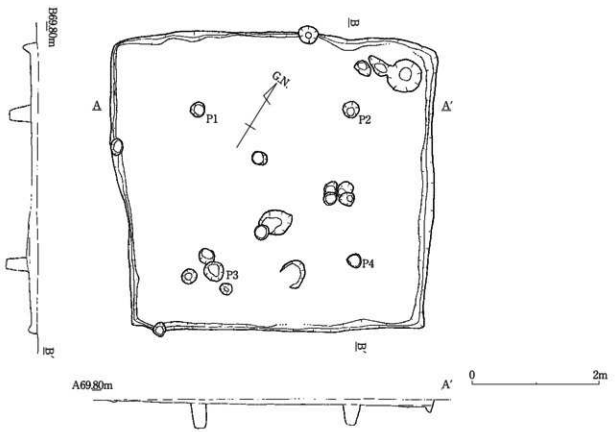
⑲SA19

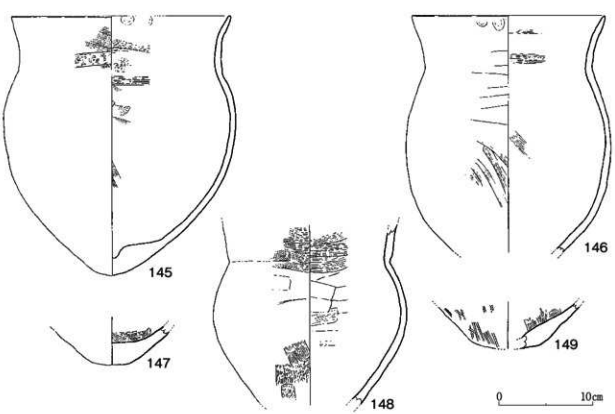
SA18を切った状態で検出された。一辺が３～3.3mのプランで、検出面からの深さは７cmに過ぎない。主柱穴は確認できない。

⑳SA20

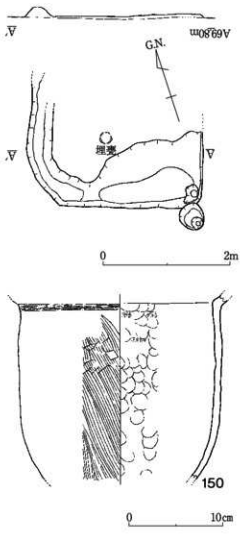
一辺が4.7～５mの方形に近いプランである。検出面からの深さは最大で12cmを測り、壁帯溝が全周している。住居に伴う柱穴は４本である。

145と146、148は土師器甕。145は頸部の稜線がはっきりしない。口縁部はゆるやかに外傾しながら立ち上がる。胴部は球形で底部は丸底を呈す。内外面ともナデ。146は頸部が





図版27　SA20と出土遺物



図版28　SA21と出土遺物

ゆるやかに屈曲し口縁部は外傾しながら立ち上がる。胴部は球形。内外面ともナデ。外面はヘラナデ。148は頸部～胴部片。頸部屈曲の稜線は明瞭。口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。胴部は球形。内外面とも板ナデを施す。147と149は土師器の底部。わずかに平底を残す。147は外面摩滅。内面はナデ。149は外面はタタキ、内面は指ナデ。

㉑SA21

埋甕が検出されたことにより、住居址が確認された。北壁と東壁はほとんど残存していないが、一辺2.8m程の小型の住居址と推定される。貼床まで掘削がおよんでおり、主柱穴も確認できない。西壁沿いに幅42cm、深さ15cmの溝が掘られているが、壁帯溝かどうか判然としない。

150は土師器甕で埋甕として使用されていた。頸部屈曲の稜線は明瞭で、長胴化を呈す。外面は胴部はハケメ、頸部付近はナデ。内面はナデと指オサエ。

㉒SA22

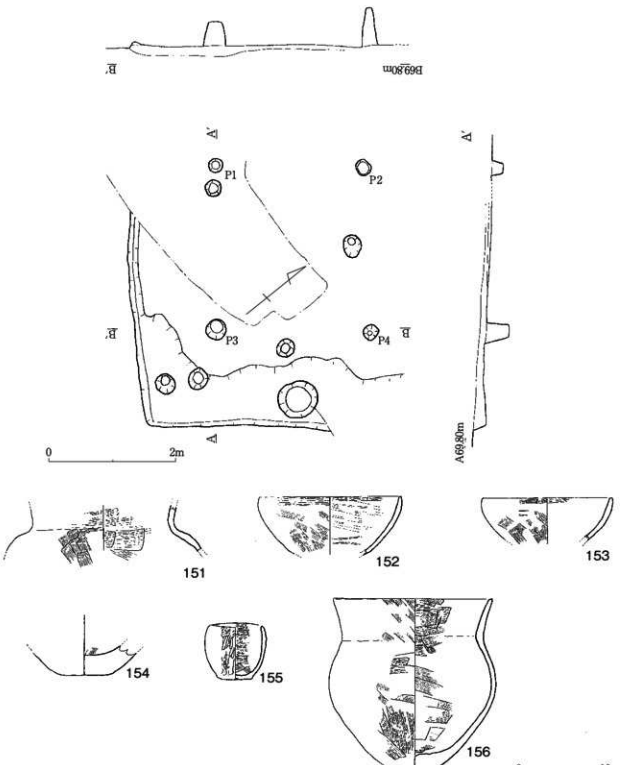
攪乱により北側の大部分を失っており、プランや規模は判然としない。検出面からの深さは最大で21cmである。一部に壁帯溝が巡っていた可能性が高い。主柱穴は４本確認されている。

151と156は土師器甕。151は肩部が張る。156は頸部がゆるやかに屈曲して口縁部は外傾しながら立ち上がる。底部は丸底を呈す。ともに内外面板ナデとヘラナデ。152と153は土師器杯で、口縁部は直立して立ち上がる。内外面ともナデで一部に板ナデ痕が残る。154は土師器の底部。平底を呈す。155は土師器の小型鉢。底部は平底で、膨らみをもちながら口縁部へ至る。外面はミガキとナデ、内面はナデ。

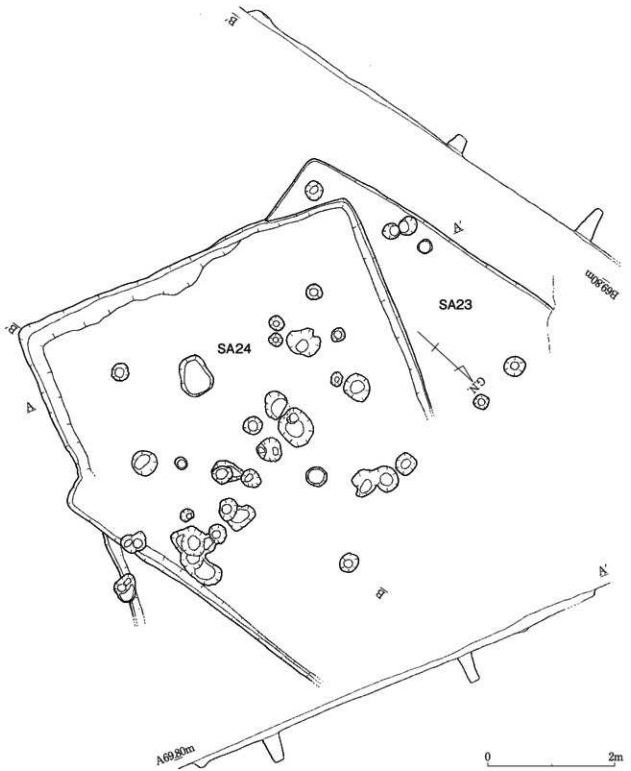
㉓SA23

北側は攪乱を受け、南側はSA24によって切られている。一辺７m程の規模になると推定される。検出面からの深さは最大で10cmに過ぎない。西壁の一部に壁帯溝が巡っているが、全周はしていないようだ。主柱穴は確認できなかった。

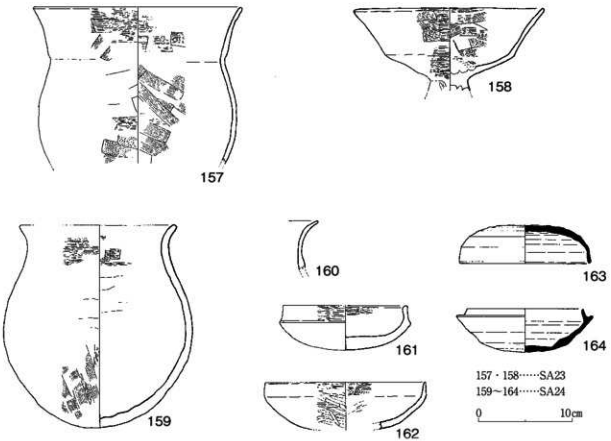
157は土師器甕で、頸部は屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。内外面とも板ナ



図版29　SA22と出土遺物



図版30　SA23・SA24



図版31　SA23・SA24出土遺物

デ。158は土師器高坏。口縁部と受け部との境が屈曲し、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともナデ。

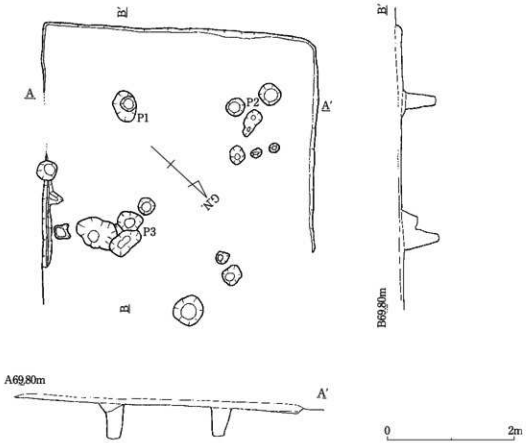
㉔SA24

北壁は削平により検出できなかったが、一辺5.7m程の規模と推定される。検出面からの深さは最大で12cmで、残存している壁に沿って壁帯溝が巡っている。全周していた可能性がある。多数の柱穴が絡んでいるが、主柱穴は４本である。

159は土師器甕で、口縁部と頸部との境が不明瞭。胴部は球体、底部は丸底を呈す。内外面ともナデ。160は土師器甕の口縁部で、頸部との境が不明瞭。摩滅が激しい。161は模倣杯。頸部で屈曲し、口縁部はやや内湾しながら直立気味に立ち上がる。外面口縁部はナデ、胴部は摩滅。内面はミガキ。162は土師器杯。口縁部はゆるく屈曲し直立気味に立ち上がる。口縁端部を鋭くおさめる。外面口縁部はナデ、胴部はミガキ。内面はミガキ。163は須恵器蓋杯。天井部からなだらかに傾斜し、口縁部は若干屈曲する。外面の回転ヘラケズリは全体の１/３。164は須恵器坏身。口縁部は短く内傾する。外面の回転ヘラケズリは全体の１/３。

㉕SA25

残存状態が悪く北東壁は検出できなかった。一辺4.4m～4.5mの規模と推定される。検



図版32　SA25

出面からの深さは最大で15cmである。南西壁の一部に壁帯溝が巡るが全周はしていなかったようだ。主柱穴は４本である。

㉖SA26

一辺が2.5～3.05m規模でプランもややいびつである。検出面からの深さは最大で10cmである。中央よりやや南寄りで埋甕を検出した。周囲は熱により赤化している。主柱穴は確認できなかった。

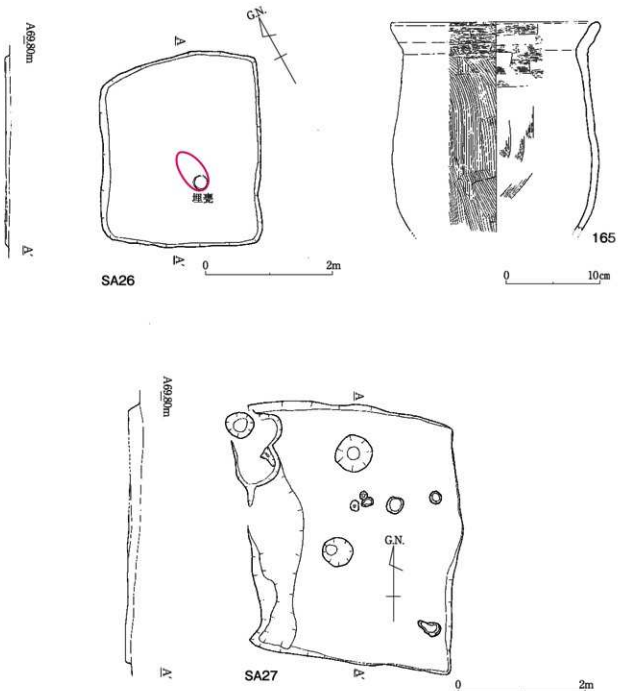
65は土師器甕で埋甕として使用されていた。頸部は屈曲し、口縁部は短く外傾しながら立ち上がる。胴部は長胴。外面口縁部はナデ、胴部はハケメ。内面はナデ。

㉗SA27

削平により西壁が完全に検出できなかったが、一辺3.2～4.05mと推定される。検出面からの深さは最大で23cmで、壁帯溝や住居に伴う柱穴は確認できない。

㉘SA28

埋甕が検出されたことにより住居址と確認された。北東壁以外はほとんど残存しておらず、規模やプランは不明である。

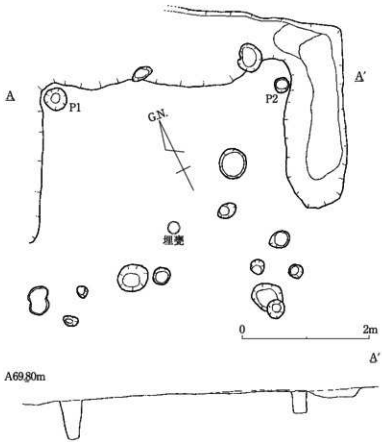


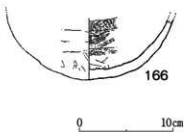
図版33　SA26と出土遺物・SA27

㉙SA29

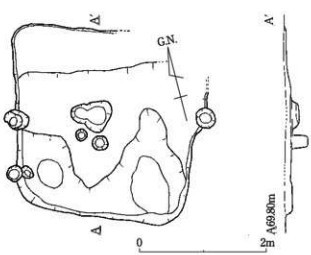
削平のため北ないし東壁の一部が検出できなかったが、一辺2.9～3.1mの規模と推定される。検出面からの深さは14cmである。壁帯溝や主柱穴は確認できなかった。

166は土師器甕で埋甕として使用されていた。底部は丸底を呈する。外面はナデのち一部ミガキ。内面はナデ。





図版34　SA28と出土遺物

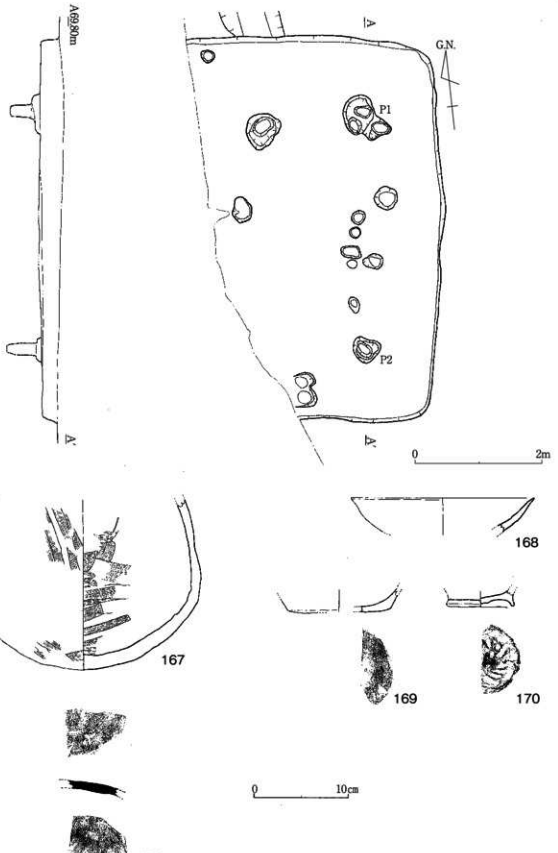


図版35　SA29

⑳SA30

攪乱により西側を失っているが、一辺６m程の規模と推測される。検出面からの深さは最大で40cmである。主柱穴を２本確認したが、全体のバランスから４本柱だろう。壁帯溝は確認できない。

167は土師器甕で埋甕として使用されていた。胴部は球体で丸底を呈する。内外面ともナデ。168は土師器高坏の口縁部片。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、先端は鋭くおさめる。169は土師器の底部で平底を呈する。170は土師器の底部で高台を有する。底面には指頭によるナデが施される。171は須恵器蓋杯の天井部。



図版36　SA30と出土遺物

2．掘立柱建物

掘立柱建物は北区で７軒、南区で10軒、総数17軒検出した。北区のものはSB６とSB７を除いて北側に集中しており、ほぼ同じ方位を向いている。桁行３間、梁行２間を基本とし、柱穴の堀方も大きく、柱痕跡が確認されるものも多い。

一方、南区のものは柱穴の堀方が小さい。この他、掘立柱建物として復元できなかったピットが約1,700検出されている。遺物は土器小片が出土しているが、図化できるようなものは出土しなかった。

①SB１

北区の北側で検出された。調査区の制約から北側の一部が未検出である。現段階では桁行２間、梁行３間であるが、３間× ３間と想定される。柱穴堀方は径40～60cmの長円～不整円形を呈し、Ｐ３以外からは柱痕跡が検出されている。柱痕跡はほぼ直線に並ぶ。主軸はＮ11° Ｅを示す。

②SB２

北区の北側で検出。SB１の東側に位置する。建物規模は桁行３間で4.4m、梁行２間で3.05m、面積13.42㎡を測る。柱穴堀方は径27～48cmの長円～不整円形を呈し、Ｐ３とＰ６以外からは柱痕跡が確認されている。ただし、柱痕跡は直線には並ばない。主軸はＮ75° Ｅを示す。

③SB３

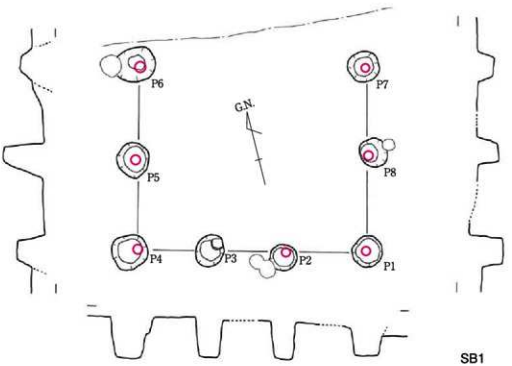
北区で検出された。SB２の南側に位置する。建物規模は桁行３間で4.74m、梁行は２間で3.2m、面積15.16㎡を測る。東側のＰ９－ Ｐ１では柱穴を確認していないが、堀方が浅かったために、検出できなかった可能性が高い。柱穴堀方は径30～50cmの不整円形を呈し、すべての柱穴から柱痕跡を確認した。柱痕跡はほぼ直線に並ぶ。主軸はＮ76° Ｅを示し、SB２とほぼ同一方位である。

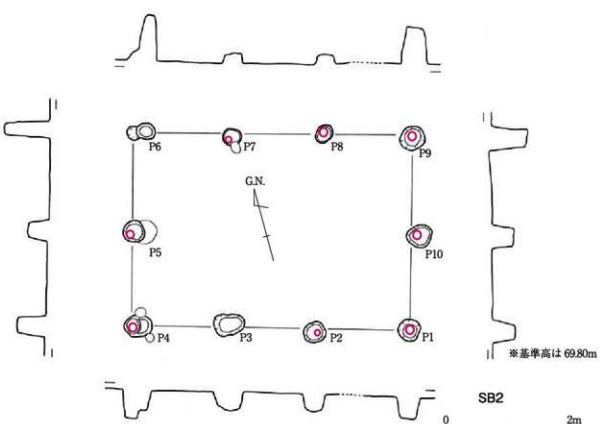
④SB４

北区で検出された。SB３の東側に位置し、SB５と重なりあっている。建物規模は桁行３間で3.75～3.8m、梁行は２間で３ ～3.18mを測り、平面形はやや歪んでいる。面積は約12㎡である。柱穴堀方は径30～51cmの不整円形で、Ｐ５以外で柱痕跡が確認できる。柱痕跡間はほぼ直線に並ぶ。主軸はＮ74° Ｅで、SB３やSB２とほぼ同一方位を示す。

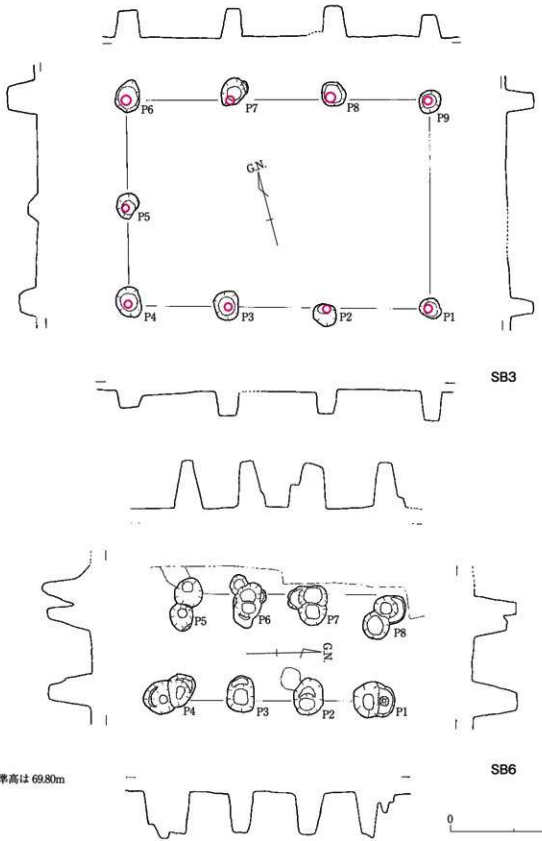
⑤SB５

北区で検出された。SB４と重なりあっている。建物規模は桁行３間で3.75～4.05m。梁行２間1.77～2.22mとかなりいびつな形状を呈す。柱穴堀方はＰ６ ～ Ｐ８が、径42～45cmを測るが、それ以外は27～32cmと小さく、不整円形を呈している。柱痕跡も直線には並ばず、歪んでいる。主軸はＮ62° Ｅを示し、SB２～SB４とは方位が異なることから、築造時期差が考えられる。

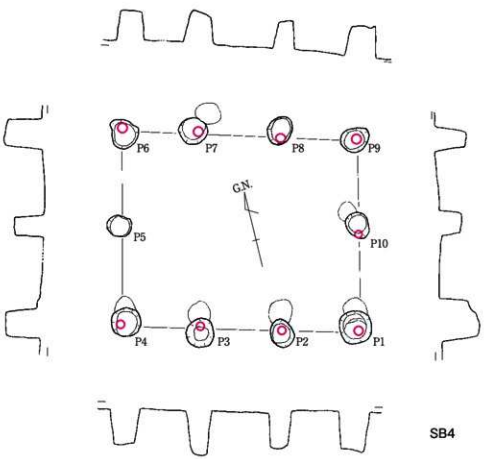

P6
P7
G.N.
P5
P8
P4
P3
P2
P1
SB1

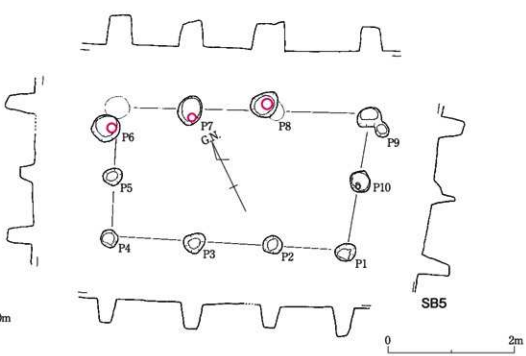

P6
P7
P8
P9
G.N.
P5
P10
P4
P3
P2
P1
※基準高は 69.80m
SB2
0
2m

図版37　SB1・SB2


P6
P7
P8
P9
G.N.
P5
P4
P3
P2
P1
SB3
P5
P6
P7
P8
G.N.
P4
P3
P2
P1
SB6
※基準高は 69.80m
0
2m

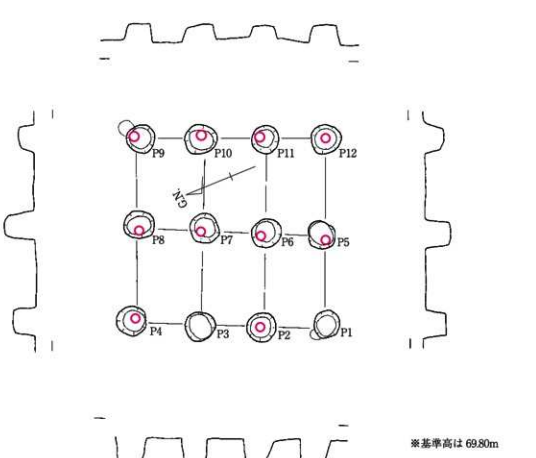
図版38　SB3・SB6





※基準高は69.80m

図版39　SB4・SB5



図版40　ＳＢ７

⑥ＳＢ６

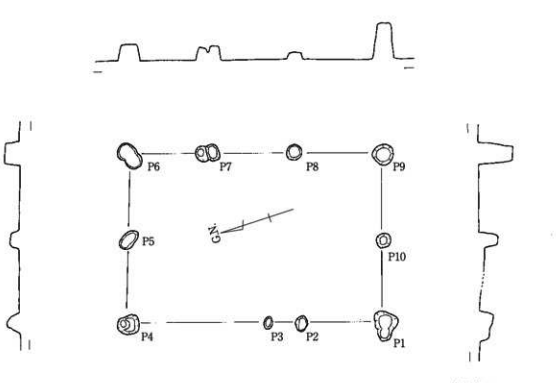
北区の西側で検出された。調査区の制約上西側の一部が未検出で、総柱建物になる可能性がある。いずれの柱穴も複数回掘削されており、建て替えが行われた可能性がある。柱痕跡は確認されていない。

⑦ＳＢ７

北区で検出された。SA13と重なりあっている。建物規模は桁行３間で３～3.1m、梁行２間2.85～３mとややいびつな形状を呈す。柱堀方は不整円形で、径42～48cmを測る。Ｐ１とＰ３以外から柱痕跡を確認しているが直線には並ばない。主軸はN22°　Ｅを示す。

⑧ＳＢ８

南区で検出された。SA29と重なっている。建物規模は桁行３間4.05m、梁行２間2.64m、面積10.69㎡を測る。ただしＰ２ないしＰ３がこの建物に含まれるかどうか判然としない。



図版41　SB8

掘削深度の浅い柱穴が消滅している可能性がある。柱穴堀方は18～45cmと小型で柱痕跡は確認できない。主軸はN18°Eを示す。

⑨SB9

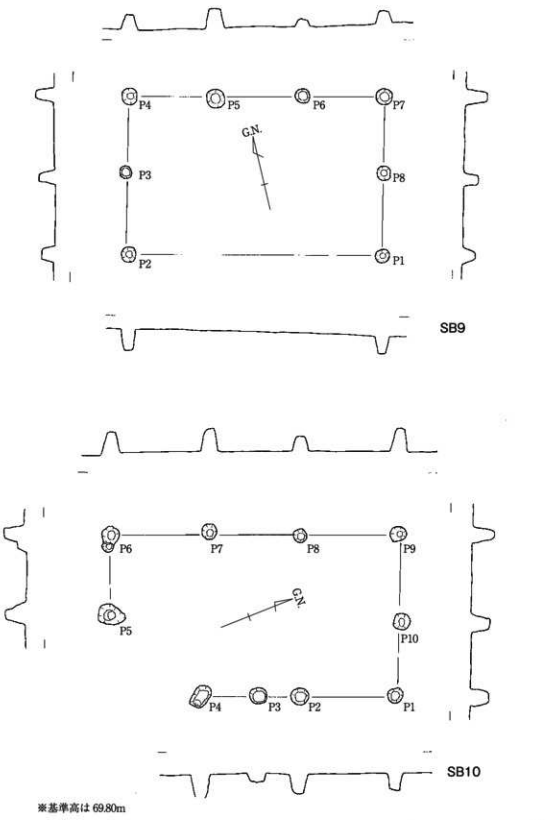
南区で検出された。SB8の東側に位置する。建物規模は現段階で桁行1～3間で4～4.05m、梁行2間で2.5mを測るが、P1とP2間の柱穴が上面掘削により消滅している可能性がある。柱堀方は18～30cmと小型で柱痕跡は確認できない。主軸は77°Eを示す。

⑩SB10

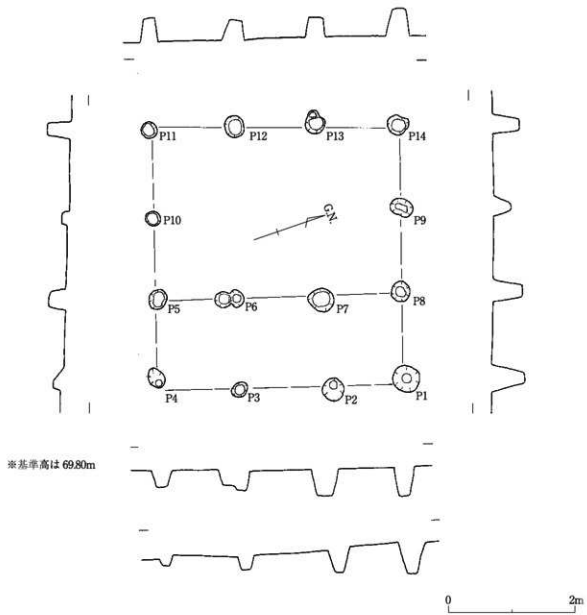
南区で検出された。SB11と重なり合っている。建物規模は現段階で、桁行3間で4.56m、梁行2間で2.55mを測る。P4とP5の間の隅角の柱穴が未確認である。また、P3はこの建物に含まれない可能性がある。柱堀方は20～42cmで長円ないし不整円形を呈する。柱痕跡は確認されていない。主軸はN23°Eを示す。

⑪SB11

南区で検出された。SB10と重なり合っている。庇付きの建物で建物本体の規模は桁行3間で3.93m、梁行2間で2.6～2.7mを測る。庇は東側に作られて、建物からの距離1.35



図版42　SB9・SB10

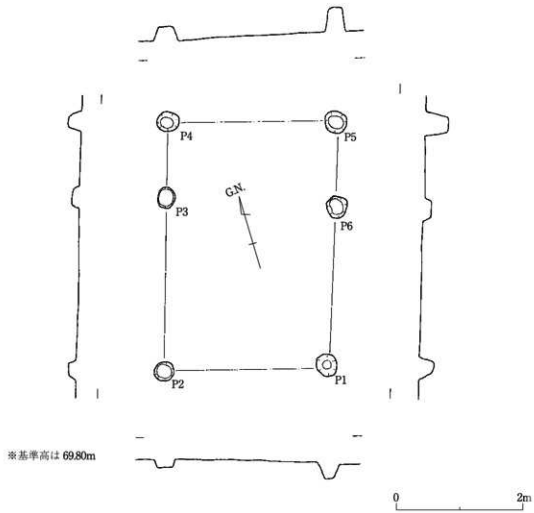


図版43　SB11

mを測る。柱穴堀方は径25～42cmで、長円ないし不整円形を呈する。柱痕跡は確認できない。主軸はN17°Eを示す。

⑫SB12

南区で検出された。SB13と重なり合っている。建物規模は桁行2間で3.87～3.96m、梁行1間で2.56～2.7mを測る。全体的に平面形はいびつで、柱穴間も一定ではない。柱穴堀方は径28～36cmの不整円形を呈する。柱痕跡は確認できない。主軸はN19°Eを示す。



図版44　SB12

⑬SB13

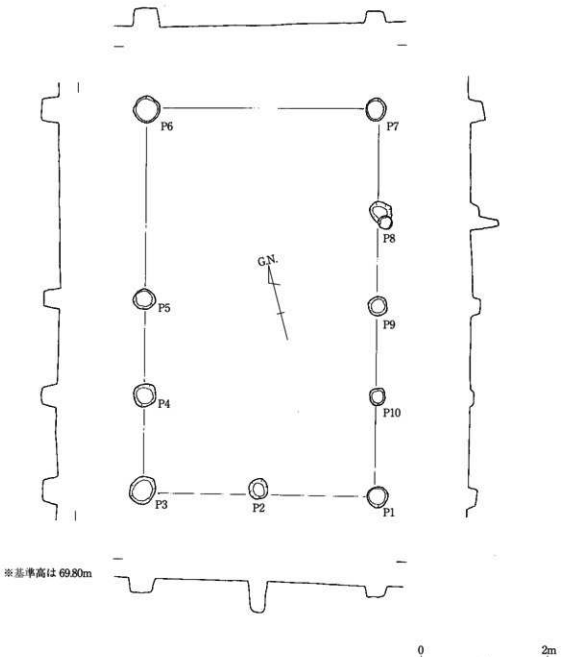
南区で検出された。SB12と重なり合っている。建物規模は桁行３～４間で6.1m、梁行１～２間で3.7m測る。Ｐ５～Ｐ６間およびＰ６～Ｐ７間に柱穴があった可能性がある。柱穴堀方は径27～42㎝の不整円形を呈する。柱痕跡は確認されていない。主軸はＮ16°Ｅを示す。

⑭SB14

南区で検出された。庇付きの建物である。建物本体の規模は桁行３～４間で5.8～5.85m、梁行２間で3.6～3.7mを測る。庇は南側と東側に設置されている。柱堀方は径20～30㎝で、建物本体と庇の柱穴とに規模の差はない。柱穴堀方の平面径は不整円形を呈する。柱痕跡は確認されていない。主軸はＮ16°Ｅを示す。

⑮SB15

南区で検出された。SB14の南側に位置する。建物規模は桁行１～２間で3.84～3.9m梁

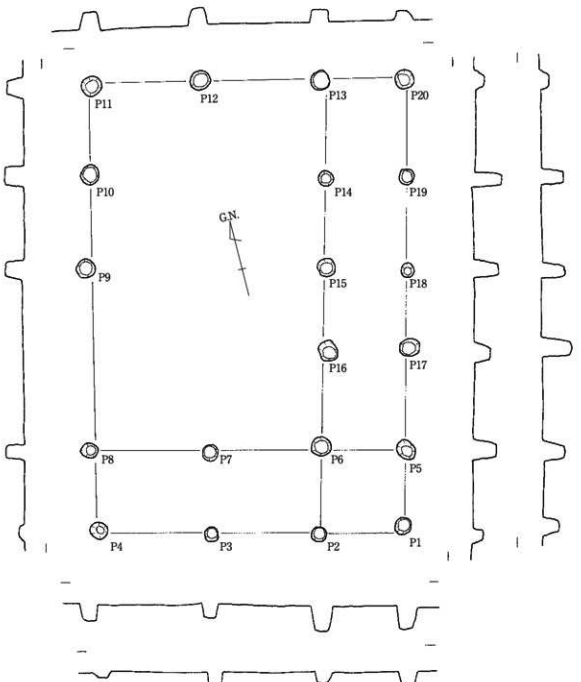


図版45　SB13

行１間2.82～2.9mである。Ｐ１とＰ５間にも柱穴があった可能性があるが判然としない。建物が小規模であることから倉庫のような使用も考えられよう。柱堀方は20～45cmで不整円形を呈す。柱痕跡は確認できない。主軸はＮ17°　Ｅを示す。

⑯SB16

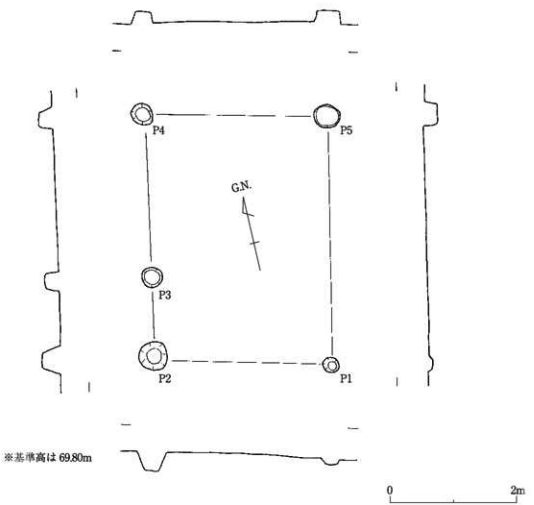
南区で検出された。建物規模は桁行４間4.65～4.8m、梁行１間2.8mを測る。柱穴は直線状には並ばず、全体的にいびつな形状である。柱穴堀方は径24～35cmで不整円形を呈す。柱痕跡は確認されていない。主軸はＮ62°　Ｅを示す。他の建物と距離があり、また主軸の



※基準高は 69.80m

0 2m

図版46 SB14

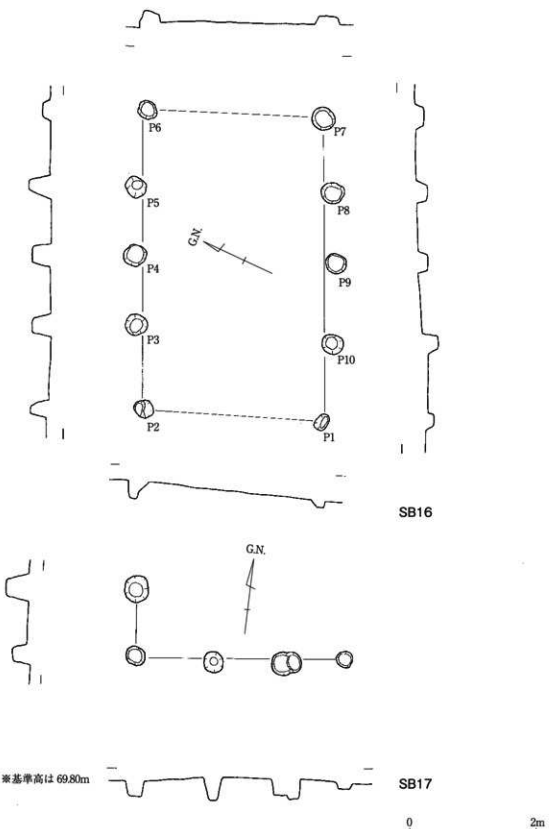


図版47　SB15

方位も異なる。時期差や使用方法の違いが指摘されよう。

⑰SB17

南区の北側で検出された。北側は調査区外、東側は攪乱のため未検出となっており、建物全体像は判然としない。柱穴堀方は径24～42cmで不整円形を呈する。柱痕跡は確認されていない。



図版48　SB16・SB17

3．土坑

土坑は全部で10基検出された。すべて北区からで南区では確認されていない。北区では北側から集中して検出され、南側では点在している程度である。

①SD1

SA1とSA3の間で検出された。規模は長軸1.04m、短軸1m、検出面からの深さ0.2mを測る。平面形は隅丸台形を呈する。

出土遺物はすべて土師器である。172は椀の口縁から胴部片。推定口径は14㎝。内外面とも回転ナデ。173は椀か皿の底部。胴部との境に段を設ける。内外面とも回転ナデ。底部はヘラオコシ。174は皿。推定口径は7.6㎝。内外面とも回転ナデ。底部はヘラオコシ。

②SD2

SA3の北西側隅角を切った状態で検出した。当初は遺構の一部が調査区外に及んでいたために、調査区を西側に拡大して全面を検出した。規模は長軸2.8m、短軸1.16m、検出面からの深さ0.36mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。

出土遺物はすべて土師器である。175は椀。推定口径12.7㎝。器高は4.2㎝。底部はヘラオコシ。胴部は回転ナデを施す。176と177は皿。176は口径8.35㎝。器高2.3㎝。177は口径8.6㎝。器高は2㎝。ともに底部は糸切りによる切り離し。178は椀の底部か。底部はヘラオコシ。

③SD3

SA4の南側で検出された。柱穴1と絡んでいる。規模は長軸0.74m、短軸0.7m、検出面からの深さ0.24mを測る。平面形は不定円形を呈する。

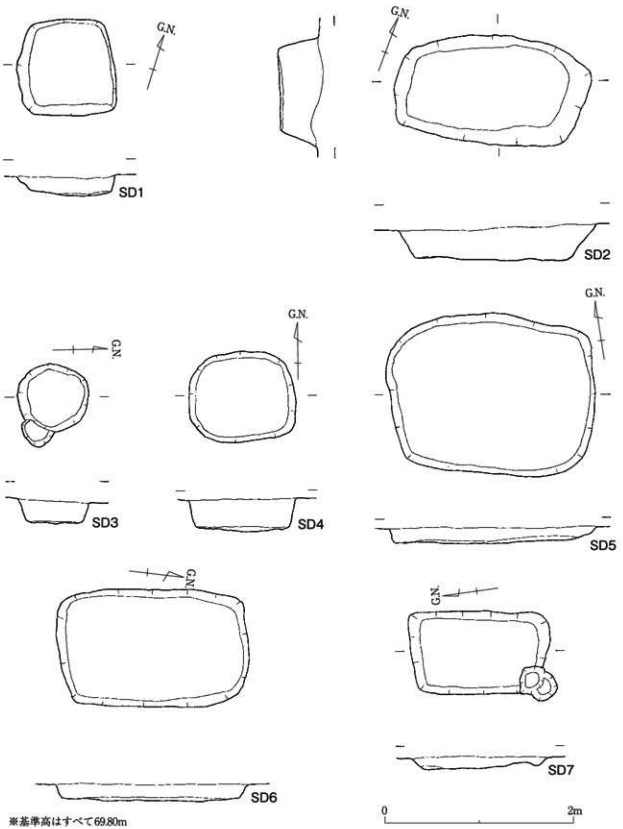
出土遺物はすべて土師器である。179から182は甕で。179は推定口径28㎝。頸部の屈曲は緩く、口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。内外面ともナデ調整。180は推定口径22㎝。頸部の屈曲は緩く、口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。内外面ともナデ。181は推定口径24㎝。頸部の屈曲はない。口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。内外面ともナデ。182は推定口径17㎝の小型品。口縁部の先端が外側に屈曲して立ち上がる。内外面ともナデ。183は高坏の受部で口縁部と受部の境が不明瞭。杯部は丸みをおびる。内外面ともナデ。184は甕か壺の底部でわずかに平底を呈す。

④SD4

SB3と同一地点で検出された。柱穴1と絡んでいる。規模は長軸1.14m、短軸0.96m、検出面からの深さ0.34mを測る。平面形は不定長円形を呈する。

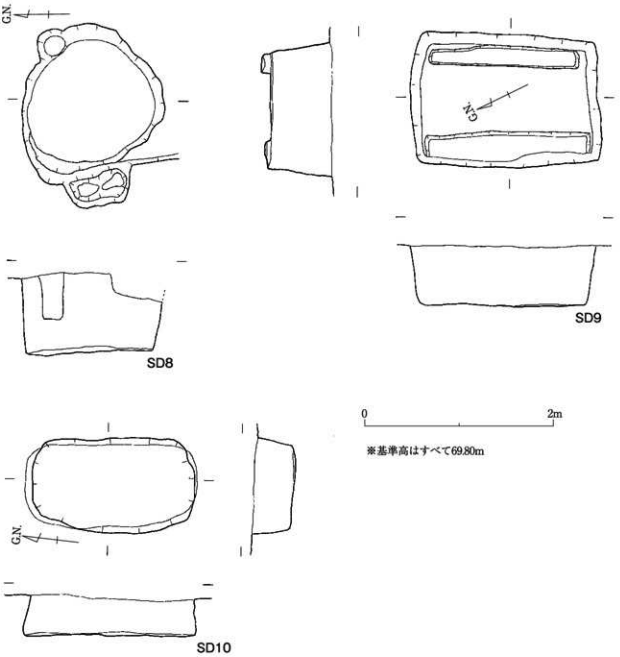
⑤SD5

SA6の南東側隅角を切るような状態で検出された。規模は長軸2.16m、短軸1.68m、検出面からの深さ0.16mと、平面規模に対して浅い。平面形は隅丸長円形を呈する。



※基準高はすべて69.80m

図版49　SD1～SD7



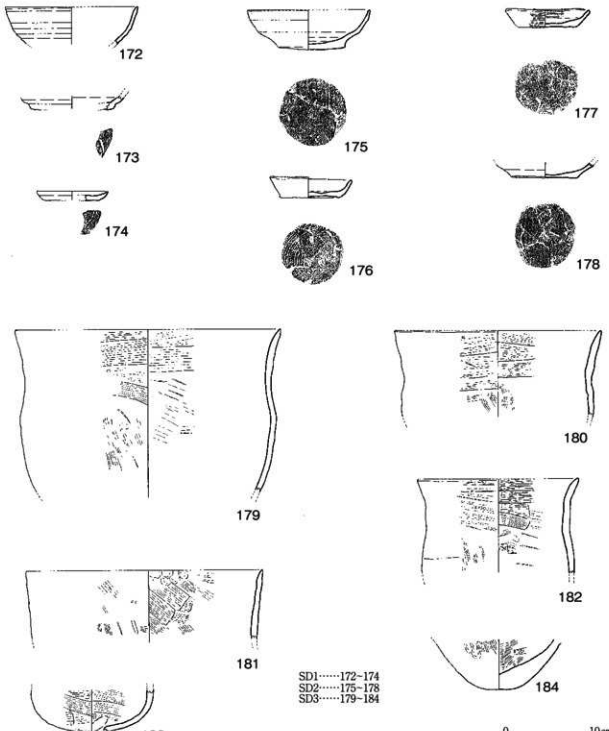
図版50　SD8～SD10

⑥SD6

SA10の南側で検出された。規模は長軸2.15m、短軸1.24m、検出面からの深さ0.18mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。

⑦SD7

SA11のほぼ中央部で検出されたが、SA11に関連するものではない。2つの柱穴によって南西側の隅角の一部が切られている。規模は長軸1.45m、短軸0.88mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。



図版51　土坑出土遺物

⑧ＳＤ８

ＳＡ９の北西側隅角を切った状態で検出された。また複数の柱穴も絡んでいる。規模は長軸1.6m、短軸1.5m、検出面からの深さ0.84mを測る。平面形は不定円形を呈する。

⑨SD９

SA９の南側で検出された。規模は長軸1.98m、短軸1.4m、検出面からの深さ0.65mを測る。平面形は長方形を呈する。長軸側の左右の側壁沿いには、幅20～40cm、深さ10～12cmの掘り込みがある。遺物は出土していないが、弥生時代の土抗墓の可能性がある。

⑩SD10

SA17の南側で検出された。規模は長軸1.72m、短軸１m、検出面からの深さは0.42mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。

４．溝状遺構

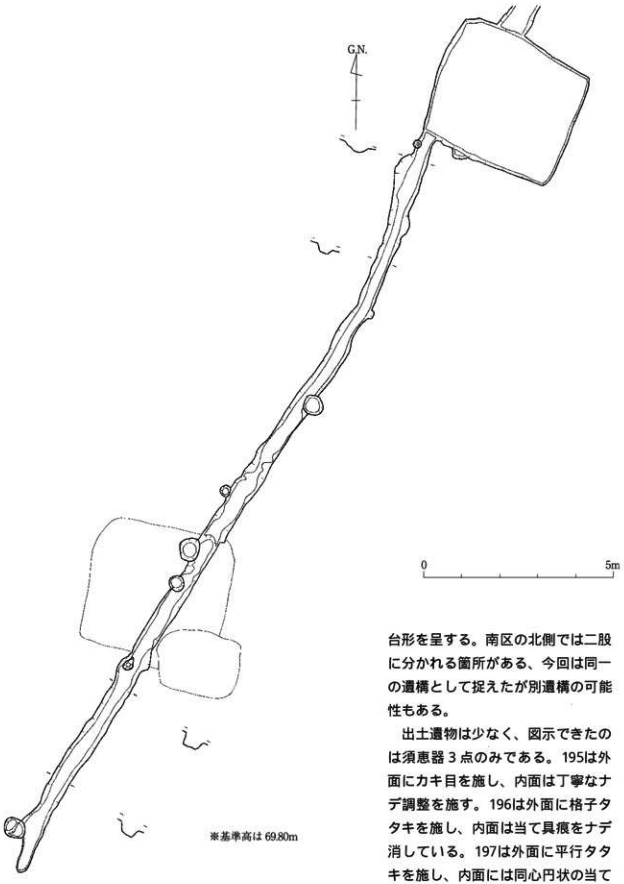
①SE１

北区で検出された。北側では調査区外まで延びており、以前調査されたE地区で検出された溝状遺構と繋がる可能性がある。南側では次第に浅くなり、SA７の北側で終結する。幅は0.5～0.7m、検出面からの深さは最大で0.3m程で、断面は台形を呈する。SA５やSA６、SB２、SB３と重なっているが先後関係は不明である。出土遺物には弥生時代の遺物から古代のものまで混入しており、古代以降に掘削された可能性が高い。

185は甕か壺の底部で平底を呈し、底面には木の葉痕が残る。弥生土器の可能性が高い。外面はナデ。内面は摩滅により不明瞭だがおそらくナデだろう。186は土師器の口縁部から胴部片である。推定口径は22cm。頸部はやや内傾しながら強く屈曲し、口縁部は外傾しながら短く立ち上がる。外面は口縁部先端がヨコナデ。頸部から胴部は斜め方向の板ナデでハケ目に近い。内面はヨコナデを施す。187は土師器甕の胴部から底部片。186と同一機種の可能性がある。外面は斜め方向の板ナデ。内面は横方向の板ないしヘラナデで、板ナデはハケ目に近い。188は土師器の皿で、推定口径16cm、器高２cmを測る。内外面とも回転ヘラケズリのち一部に回転ナデを施す。底部の切り離しはヘラオコシである。189も土師器の皿で口径17.7cm、器高2.1cmを測る。内外面とも回転ナデを施し、底部の切り離しはヘラオコシである。190は須恵器蓋杯の天井から口縁部片で、天井部と口縁部との境に段を設ける。外面は天井部に回転ヘラケズリと回転ナデ。口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデを施す。191は須恵器杯身の口縁部片。口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、先端を鋭くおさめる。外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。192は須恵器甕の頸部片。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。外面表面には自然柚がかかる。外面は回転ナデ。内面は回転ナデ、肩部では同心円状の当て具痕。193は須恵器の胴部片。外面は平行タタキ、内面には当て具痕が残る。194は須恵器片で肩部付近だろう。外面は平行タタキで、表面に自然柚が残る。内面は当て具痕。

②SE２

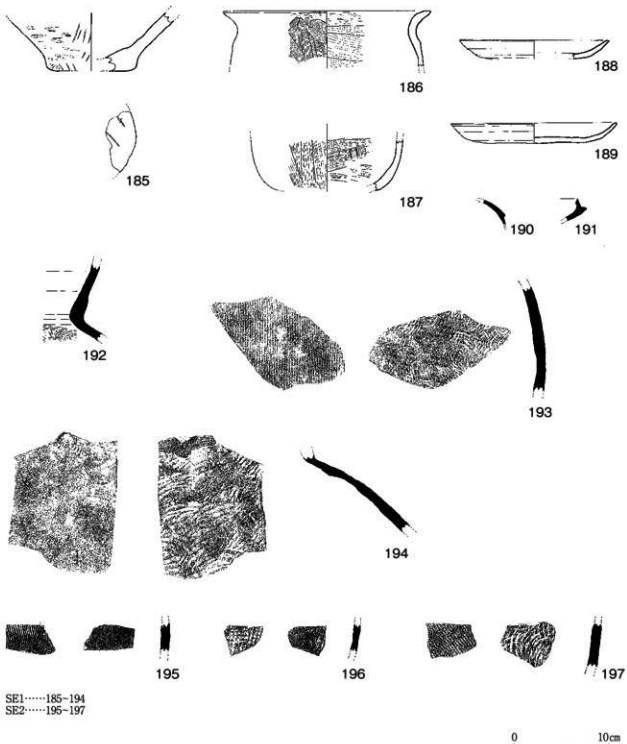
北区の南西部から、南区の北西部にかけて延びている。調査区の制約上北区と南区との間が未検出となっているが、同一遺構として取り扱う。遺構北側では最近の攪乱によって終結しているが、北ないし北西方向に延びていくものと推測される。南側ではSA30に突きあたって終結しているが、SA30との先後関係は不明である。また、さらに南側へ続いていた可能性がある。幅は１～1.8m、検出面からの深さは最大で0.35mを測る。断面は



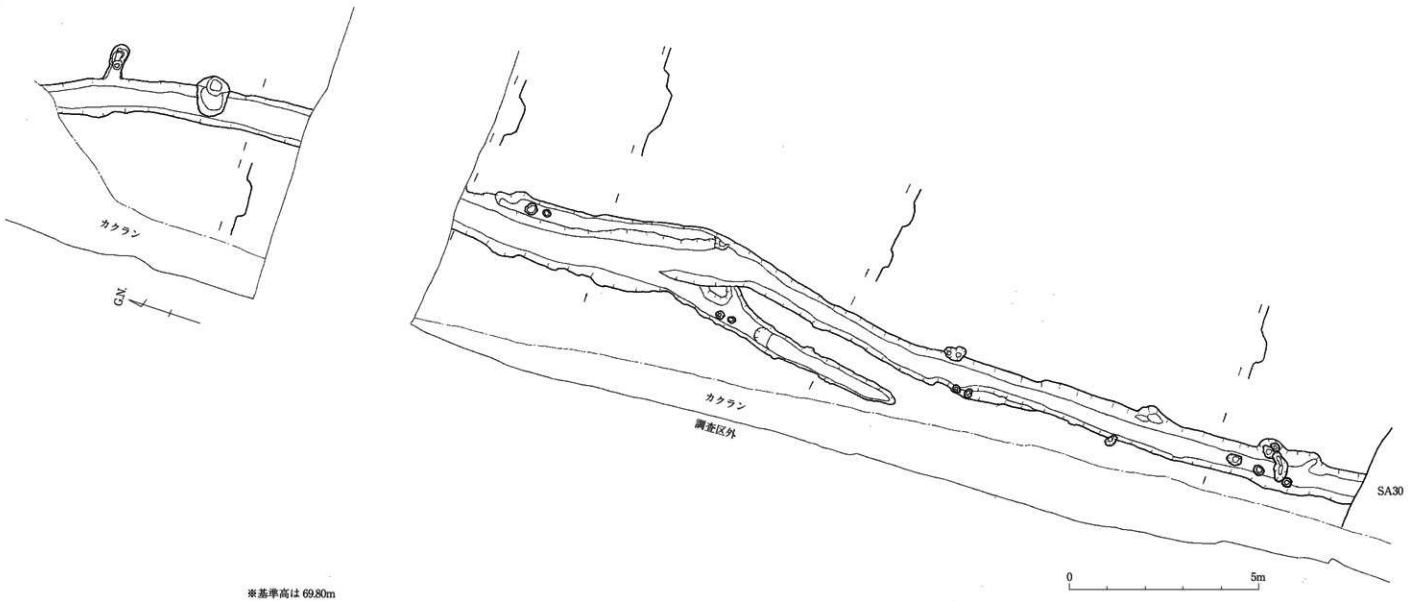
台形を呈する。南区の北側では二股に分かれる箇所がある、今回は同一の遺構として捉えたが別遺構の可能性もある。

出土遺物は少なく、図示できたのは須恵器３点のみである。195は外面にカキ目を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。196は外面に格子タタキを施し、内面は当て具痕をナデ消している。197は外面に平行タタキを施し、内面には同心円状の当て具痕が残る。

図版52　SE１



図版53　SE１・SE２出土遺物



※基準高は 69.80m

図54　SE2

表２　上圃遺跡Ⅰ地区出土土器観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
1	SA１	土師器	甕	口縁から胴部	20%	口径(24.2cm) 胴部径(26.4cm)	口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。	内外面とも指頭によるナデ。	灰赤 2.5YR5/2 赤灰 2.5YR4/1	橙 2.5YR6/8	精良 普通	
2	SA１	土師器	甕	口縁から胴部	20%	口径(22cm) 胴部径(20.6cm)	頸部はくの字に屈曲。口縁部は外開きで立ち上がる。	外面は口縁部はナデ。胴部はタタキ。内面はナデ。	淡黄 2.5YR8/3	淡黄 2.5YR8/4	やや粗 普通	
3	SA１	土師器	甕	口縁から胴部	30%	口径(19cm) 胴部径(22cm)	口径より胴部径が大きい。頸部の屈曲部は不明瞭。	内外面とも板状工具によるナデ。	橙 2.5YR 7/8～6/8	橙 2.5YR6/8	普通 普通	
4	SA１	土師器	小型甕	口縁から胴部		口径(14.9cm) 胴部径(16.2cm)	口縁部は短く外傾しながら立ち上がる。	外面ミガキ。内面はナデ。	黄橙 10YR8/6 にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/6 にぶい黄橙 10YR6/3	普通 普通	
5	SA１	土師器	小型甕	胴部	20%	胴部径(13.2cm)	丸みを帯びた胴部を呈する。	内外面とも板状工具によるナデ。内面はハケメに近い。	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR4/1	精良 良好	
6	SA１	土師器	杯	完形	100%	口径 9.5cm 底径 4.25cm 器高 3.6cm	口縁部は内傾しながら短く立ち上がる。	内外面ともナデ。	橙 5 YR7/6 明黄褐 10YR7/6	橙 2.5YR7/8 橙 7.5YR7/6	精良 良好	
7	SA１	土師器	高坏	脚部	10%		柱状部はやや内傾して立ち上がる。	外面はミガキ。内面はナデ。	橙 2.5YR7/8	橙 7.5YR7/6 橙 2.5YR7/8	普通 普通	
8	SA１	土師器	高坏	脚部	10%		柱状部はやや内傾して立ち上がる。	外面はミガキ。内面はナデ。	浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	
9	SA１	土師器		底部	10%以下		尖底。	外面は不明瞭。内面は指によるナデ。	にぶい黄橙 5YR6/3 暗赤褐 5YR3/3	褐灰 5YR4/1	普通 普通	
10	SA２	土師器	甕	口縁～底部	70%	口径 16.25cm 胴部径 27.6cm	頸部はゆるやかに屈曲し、口縁端部が外反する。	内外面ともナデ。一部板ナデ。	橙 5YR7/6 明黄褐 10YR7/6	橙 5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 普通	
11	SA２	土師器	甕	口縁～胴部	30%	口径(28.4cm) 胴部径 26.8cm	頸部はゆるやかに屈曲。	内外面ともナデ。一部板ナデ。	橙 7.5YR7/6 にぶい褐 7.5YR5/3	橙 7.5YR7/6 灰褐 7.5YR5/2	やや粗 普通	
12	SA２	土師器	甕	口縁～胴部	30%	口径 18.6cm 胴部径 18.2cm	頸部はゆるやかに屈曲。	内外面ともナデ。一部板ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 普通	
13	SA２	土師器	甕	口縁～胴部	20%	口径 26.8cm 胴部径 25.4cm	頸部はゆるやかに屈曲。胴部は張らない。	内外面ともナデ。一部ヘラナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
14	SA２	土師器	甕	口縁～胴部	30%	口径(22cm) 胴部径 23.8cm	頸部はくの字状に屈曲。胴部は球体。	内外面ともナデ。一部板ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 10YR8/6	普通 普通	
15	SA２	土師器	甕	口縁～胴部	20%	口径(25cm)	頸部はゆるやかに屈曲する。	内外面ともナデ。	淡橙 5YR8/4 淡黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
16	SA２	土師器	甕	口縁～頸部	10%以下	口径(24cm)	頸部はゆるやかに屈曲する。	内外面ともナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
17	SA２	土師器		底部	10%以下		丸底を呈す。	内外面ともナデ。	浅黄 2.5Y7/3	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
18	SA２	土師器		底部	10%以下		丸底を呈す。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	粗 良好	
19	SA２	土師器	壺	頸部～胴部	20%	胴部径 22cm	頸部はくの字に屈曲。胴部は長胴化。	内外面ともナデ。一部板ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3 灰黄 2.5Y7/2	普通 不良	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
19	SA 2	土師器	壺	頸部～胴部	20%	胴部径 22cm	頸部はくの字に屈曲。胴部は長胴化。	内外面ともナデ。一部板ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3 灰黄 2.5Y7/2	普通 不良	
20	SA 2	土師器	壺	口縁～頸部	10%	口径 15cm	頸部に斜めの凹線がはいった突帯が施される。	内外面ともナデ。	橙 5YR7/6 浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1 浅黄橙 10YR8/4	粗 良好	
21	SA 2	土師器	甕	口縁～胴部	10% 以下		頸部は屈曲する。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4	粗 良好	
22	SA 2	土師器	甕	口縁～胴部	10% 以下		頸部は屈曲せず、口縁はゆるやかに外反して立ち上がる。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3 灰白 10YR8/2	普通 不良	
23	SA 2	土師器		胴部～底部	40%	底径（6cm）	平底を呈し、張出気味となる。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 不良	
24	SA 2	土師器		胴部～底部	20%		底部は丸底を呈す。	外面はハケメ。ヘラナデ。内面は板ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	灰 10Y4/1	普通 不良	
25	SA 2	土師器	壺	口縁部	10% 以下		頸部に斜めの沈線がはいった突帯を施す。	内外面ともナデ。	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 不良	
26	SA 2	土師器		底部	10% 以下	底径 5.5cm	底部は平底を呈す。	内外面とも指ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	粗 普通	
27	SA 2	土師器		底部	10% 以下	底径 5 cm	底部は上げ底になる。	内外面ともナデ。外面の一部に指ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	普通 良好	
28	SA 2	土師器		底部	10% 以下	底径 5.1cm	底部は上げ底になる。	外面は不明瞭。内面はナデ。	浅黄橙 2.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	粗 普通	
29	SA 2	土師器		底部	10% 以下		底部は丸底を呈す。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/3	黒褐 10YR3/1	粗 普通	
30	SA2	土師器		底部	10% 以下		丸底を呈す。	磨滅により不明瞭。	淡黄 2.5Y8/4	淡黄 2.5Y7/3	粗 普通	
31	SA2	土師器	高坏	全形	80%	口径 25.9cm 底径 17.95cm 器高 14.15cm	脚部はハの字状に大きく開く。口縁と受部との境が明瞭	内外面ともナデ。内面の底部付近の一部にミガキ。	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 良好	
32	SA2	土師器	高坏	全形	90%	口径 15.45cm 底径 10.2cm 器高 8.95cm	口縁と受部との境が不明瞭。	外面はナデ。内面はケズリと板ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4 淡黄 2.5Y8/4	普通 良好	
33	SA2	土師器	高坏	受部～脚部	40%	底径 11.9cm	脚部はハの字状に開く。	外面はナデとミガキ。内面はナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 良好	
34	SA2	土師器	高坏	脚部	20%	底径 12.1cm	柱状部は中央がやや膨らむ。	内外面ともナデ。内面は指ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 良好	
36	SA2	土師器	高坏	脚部	20%	底径(9 cm)	脚部はハの字状に開く。	外面はナデとミガキ。内面はナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4 にぶい黄橙 10YR7/3	普通 良好	
37	SA2	土師器	小型壺	全形	100%	口径 8 cm 胴部径 7.2cm 器高 8.8cm	底部は丸底。頸部は強く屈曲する。	磨滅により不明瞭。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	精良 不良	38
38	SA2	土師器	高坏	脚部	30%	底径 9 cm	脚柱部は直立。	外面はナデとミガキ。内面はナデ。	黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/4 にぶい黄橙 10YR7/3	普通 良好	
39	SA2	土師器	小型壺	胴部～頸部	60%	胴部径 6.8cm 底径 3.6cm	胴部は球体。底部は上げ底を呈す。	外面はナデの ちミガキ。内面は指ナデ。	橙 5YR7/6 橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR6/8	普通 良好	
40	SA2	土師器	小型壺	胴部	20%	胴部径 5 cm	胴部は球体を呈す。	磨滅により不明瞭。	橙 7.5YR7/6	灰白 10Y7/2	精良 不良	
41	SA2	土師器	小型鉢	全形	70%	口径 5 cm 器高 2.2cm	底部は平底。	内外面とも指ナデ。	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	粗 不良	
42	SA2	土師器		底部	20%		底部は丸底を呈す。	外面はナデとヘラナデ。内面はナデと指オサエ。	にぶい黄橙 10YR7/4 黒褐 10YR2/2	橙 2.5YR6/8 黄橙 7.5YR7/8	普通 良好	
43	SA 2	土師器	杯	口縁～胴部	10% 以下		口縁部は直立。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
44	SA 2	土師器	高坏	脚部	30%	底径 12.8cm	脚部はハの字状に開く。	内外面ともナデ。内面は一部に指ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 良好	
45	SA 2	須恵器	杯蓋	天井部～口縁部	10%	口径(16cm)	天井部からなだらか傾斜し口縁部は直立する。	外面は回転ナデ。回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。	オリーブ灰 5GY5/1	緑灰 10GY5/1	普通 普通	
46	SA 3	土師器	甕	口縁～胴部	50%	口径 15.2cm 胴部径 20.4cm	頸部の屈曲はよっきりしない。	内外面とも工具ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 良好	
47	SA 3	土師器	脚台杯鉢	胴部～底部	30%	底径 6 cm	脚部は充実高台。	内外面とも指によるナデ、オサエ。	橙 5YR7/8	橙 5 YR7/6	粗 良好	
48	SA 3	土師器	小型壷	全形	70%	口径 11.3cm 胴部径 14cm 器高 10.5cm	口縁部は短く外傾する。底部は平底を呈する。	内外面ともヘラ状工具ナデか。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	
49	SA 3	土師器	杯	全形	90%	口径 15.4cm 器高 6.95cm	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。底部は平底。	内外面ともミガキ。	橙 2.5YR7/8 橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR6/8 橙 5YR7/6	普通 普通	
50	SA 3	土師器	高坏	脚部	20%		柱状部は直線状に立ち上がる。	外面は指によるナデとオサエ。内面は不明。	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/8	普通 普通	
51	SA 3	土師器	ミニチュア土器	全形	70%	口径 6.6cm 底径 4 cm 器高 2.6cm	口縁部は外傾しながら立ち上がる。	内外面とも指によるナデ、オサエ。	橙 5YR7/8	橙 5YR7/8	精良 良好	
52	SA 3	土師器	杯	全形	100%	口径 14.6cm 底径 7.1cm 器高 6.5cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。	内外面ともナデ。	橙 5YR6/6 明黄褐 10YR7/6	橙 2.5YR6/8	普通 良好	
53	SA 3	土師器	杯	全形	70%	口径 16.1cm 器高 6.2cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。底部は平底。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	
54	SA 3	土師器	椀	口縁～胴部	40%	口径(13.3cm)	口縁部は外開きで立ち上がる。胴部との境が不明瞭	内外面とも指によるナデ。外面は一部に指オサエ。	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	普通 良好	
55	SA 3	土師器	穏か壷	底部	10% 以下		丸底を呈す。	内外面とも指ナデとヘラナデ。	橙 2.5YR7/8 橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6 褐灰 5YR5/	やや粗 良好	
56	SA 3	土師器	穏か壷	底部	10% 以下		上げ底を呈す。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1 灰白 10YR8/2	普通 良好	
57	SA 3	土師器	穏か壷	底部	10% 以下		丸底を呈す。	外面は板ナデと指ナデ。内面は不明瞭。	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	淡橙 5YR8/4	やや粗 普通	
58	SA 4	土師器	甕	全形	90%	口径(14.3cm) 胴部径 15.9cm 器高 23.45cm	口縁は外開き。底部はほぼ丸底を呈す。	外面は不明瞭。内面はナデ。	浅黄橙 10YR8/8	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 良好	
59	SA 4	土師器	杯	口縁～胴部	30%	口径 (15cm)	口縁は直線状に立ち上がり、胴部との境が不明瞭。	内外面ともナデ。	浅黄橙 7.5YR8/6	黄橙 7.5YR8/8	精良 不良	
60	SA 4	須恵器	杯蓋	全形	50%	口径(13.9cm) 器高 4.25cm	口縁部と胴部との境に凹線を施す。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰 N6/	灰 7.5Y6/	普通 普通	
61	SA 5	土師器	皿	全形	40%	口径 16.5cm 底径 10.1cm 器高 3.2cm	口縁は外反しながら立ち上がり先端を平たくおさめる。	内外面とも回転ナデ。底部はへらおこし。	橙 5 YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	普通 良好	
62	SA 5	土師器	椀	胴部～底部	30%	底径(7.9cm)	底部はわずかに高台を呈する。	内外面とも回転ナデ。底部は糸切りか。	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	粗 良好	
63	SA 5	土師器	椀	口縁～底部	30%	口径(12.7cm) 底径(8.5cm) 器高 3.3cm	口縁は外反しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。底部はへらおこし。	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	普通 良好	
64	SA 5	土師器	椀	底部	10%	底径(7cm)		内外面とも回転ナデ。底部はへラおこし。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	普通 普通	
65	SA 5	土師器	椀	底部	10% 以下	底径(8.9cm)		内外面とも回転ナデ。底部はへラおこし。	灰黄褐 10YR4/2	橙 5 YR7/8	普通 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
66	SA5	土師器	椀	底部	10%以下	底径(9 cm)		摩滅激しいが内外面とも回転ナデ。底部はヘラおこし。	黄橙 7.5YR8/8	黄橙 7.5YR7/8	普通 普通	
67	SA6	須恵器	甕	口縁～頸部	10%以下	頸部径 (19cm)	頸部は強く屈曲する。	外面は回転ナデとタタキ。内面は回転ナデと当て具痕。	灰N4/ 灰白 2.5GY8/1	オリーブ灰 5GY5/1 明オリーブ灰 5GY4/1	やや粗 普通	
68	SA6	須恵器	杯蓋	口縁～天井部	10%以下	口径(12cm) 器高(3.5cm)	天井部からなだらかに口縁部へと至る。	回転ナデ。回転ヘラケズリは全体の 1/5。	灰N4/	灰N5/	普通 良好	
69	SA6	須恵器	杯身	口縁部	10%以下		口縁部は強く内傾して立ち上がる。	内外面回転ナデ。	灰N5/	灰N5/	普通 普通	
70	SA6	土師器	高坏	脚部	10%以下		柱状部はエンタシス状に膨らみをもつ。	外面はナデ。内面は不明。	淡黄 2.5Y8/4	にぶい黄橙 2.5Y6/3	普通 良好	
71	SA8	土師器	甕	胴部～底部	60%		底部はわずかに平底を残す。	外面は工具ナデ。内面は工具ナデと底部付近は指ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4 橙 7.5YR7/6	淡黄 2.5Y7/3	普通 普通	
72	SA8	土師器	甕	全形	80%	口径 18.75% 底径 14.7cm 器高 17.5cm	口縁は肥厚し短く外反して立ち上がる。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい橙褐 5YR5/3	にぶい橙 7.5YR7/4	普通 普通	
73	SA8	土師器	鉢	全形	60%	口径(10.4cm) 底径 6.3cm 器高 7.7cm	口縁部と胴部との境に段を設ける。	内外面ともナデ。	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/3	橙 7.5YR7/8 橙 7.5YR7/6	普通 普通	
74	SA8	土師器	模倣杯	口縁～底部	30%	口径(15.2cm)	口縁部はわずかに内傾する。全体的に厚く作られている。	内外面ともミガキ。	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	普通 良好	
75	SA8	土師器	壷	頸部	10%以下		頸部に斜めの沈線を施した突帯をつける。	摩滅により不明瞭。	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	やや粗 普通	
76	SA8	弥生土器	甕か壷	底部	10%以下	底径 10.6cm	底部は張り出し気味で平底を呈す。	内外面ともナデと一部に指オサエ。底面に木の葉痕。	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	粗 普通	
77	SA8	土師器	甕か壷	底部	10%以下	底径(7.2cm)	底部は平底を呈す。	外面はナデと指オサエ。内面は不明瞭。	灰白 10YR8/2	黒褐 10YR3/1	やや粗 良好	
78	SA8	須恵器	杯身	口縁～胴部	10%	口径(12.2cm)	口縁は内傾して立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。外面の回転ヘラケズリは全体の 1/4。	灰5Y6/1	灰5Y6/1	やや粗 普通	
79	SA8	須恵器		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当て具痕。	灰N5/	オリーブ灰 2.5GY6/1	やや粗 普通	
80	SA8	須恵器		胴部	10%以下			外面は格子タタキ。内面は当て具痕。	暗緑灰 10GY3/1	暗オリーブ灰 5GY	普通 普通	
81	SA8	須恵器		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は当て具痕。	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	やや粗 普通	
82	SA9	須恵器	杯蓋	全形	70%	口径(15.9cm) 器高 5.15cm	口縁部と胴部との境に凹線を施す。口縁先端は鋭くおさめる。	内外面とも回転ナデ。回転ヘラケズリは全体の 1/6。	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	普通 普通	
83	SA9	須恵器	杯蓋	天井部	10%以下			内外面とも回転ナデ。外面は回転ヘラケズリ。	緑灰 10GY6/1	緑灰 7.5GY6/1	やや粗 普通	
84	SA9	須恵器		口縁部	10%以下		口縁先端を平たくおさめる。	内外面とも回転ナデ。	暗灰 N3/	暗オリーブ灰 5GY4/1	やや粗 不良	
85	SA9	須恵器	杯蓋	完形	100%	口径 11.75cm 器高 4.3cm	口縁部は短く内傾する。	内外面とも回転ナデ。外面の回転ヘラケズリは全体の 1/3。	灰N6/	灰N6/	普通 普通	
86	SA9	須恵器	杯身	口縁～胴部	10%以下	口径(11cm)	口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。外面は回転ヘラケズリ。	灰N5/ オリーブ灰 2.5GY5/1	灰N5/	普通 普通	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
87	SA9	須恵器	杯身	口縁～胴部	10%以下	口径(12cm)	口縁部はやや内傾しながら立ち上がり先端鋭くおさめる。	内外面とも回転ナデ。外面は回転ヘラケズリ。	明緑灰 7.5GY7/1	明緑灰 7.5GY7/1	やや粗 普通	
88	SA9	土師器	杯	全形	60%	口径(14.2cm)	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 普通	
89	SA9	土師器		底部	10%以下	底径(5.8cm)	底部は平底で、張り出し気味になる。	摩滅により不明瞭。	暗赤灰 2.5YR 3/1	橙 2.5YR7/8	普通 不良	
90	SA9	土師器	高坏	脚部	10%以下		柱状部はエンタシス状に膨らみをもつ。	外面はナデ。内面は不明瞭。	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 2.5YR7/6	精良 良好	
91	SA10	土師器	甕	胴部～底部	50%	底径(6.5cm)	胴部はやや長胴化。底部は平底を呈す。	外面はヘラナデ。内面も工具ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR 7 /4	普通 普通	埋甕
92	SA10	土師器	壷	頸部	10%以下		頸部に斜めの沈線を施した突帯をつける。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	普通 普通	
93	SA10	土師器		底部	10%以下	底径(4.4cm)	底部は平底で上げ底気味になる。	摩滅により不明瞭。	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7 .5YR8/4	普通 良好	
94	SA10	須恵器	杯蓋	口縁～胴部	10%以下			内外面とも回転ナデ。外面には回転ヘラケズリ。	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	やや粗 普通	
95	SA10	須恵器	杯身	口縁部	10%以下		口縁端部を鋭くおさめる。	内外面回転ナデ。	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	普通 普通	
96	SA11	土師器	甕	胴部～底部	40%	底径 4.5cm	胴部はやや長胴化。底部は平底を呈す。	内外面ともナデ。	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 普通	埋甕
97	SA11	土師器	甕	胴部～底部	40%		胴部はやや長胴化。底部は丸底を呈す。	内外面ともナデ。	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	普通 良好	埋甕
98	SA12	土師器	甕	口縁～胴部	40%	口径(16.4cm) 胴部径 (18.4cm)	口縁部はほぼ直立気味に立ち上がる。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 普通	
99	SA12	土師器	甕	口縁～胴部	30%	口径(13.5cm)	口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。	内外面ともナデ。	橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 普通	
100	SA12	土師器	甕	口縁～胴部	10%以下	口径(21.8cm)	頸部はゆるく屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がる。	摩滅激しいが、内外面ともナデだろう。	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/8	普通 普通	
101	SA12	土師器	甕	頸部～胴部	30%	胴部径 (22cm)	胴部のほぼ中央が最大径となる。	外面は板ナデ。内面は不明瞭。	橙 7.5YR8/8	浅黄橙 10YR8/4	普通 良好	
102	SA12	土師器	甕	胴部～底部	50%	胴部径 (18.6cm)	胴部は長胴化。底部は丸底を呈す。	内外面とも工具ナデと指ナデを施す。	浅黄 2.5Y7/3	橙 5YR7/6	普通 普通	埋甕
103	SA12	土師器		底部	10%以下		丸底を呈す。	摩滅により不明瞭。	浅黄橙 7.5YR8/6 灰オリーブ 5Y6/2	にぶい橙 5YR7/4	普通 普通	
104	SA12	土師器		底部	10%以下		丸底を呈す。	摩滅により不明瞭。	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/4	普通 普通	
105	SA12	土師器	甕	口縁～底部	40%	口径 22.6cm 胴部径 (24.3cm)	頸部は屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。	内外面ともナデ。	橙 7.5YR7/6 浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4 灰黄褐 10YR5/2	普通 普通	
106	SA12	土師器		胴部～底部	10%以下		やや平底を呈している。	外面はナデ。内面は不明瞭。	橙 2.5YR7/8	明灰黄 2.5Y5/2	やや粗 やや不良	
107	SA12	土師器	杯	完形	100%	口径 11.7cm 器高 6.1cm	口縁部は若干内湾する。底部は平底を呈す。	内外面ともナデ。	橙 5YR7/6	浅黄橙 10Y R8/4	普通 良好	
108	SA12	土師器	杯	口縁～胴部	60%	口径(13.8cm)	口縁部はほぼ直立気味に立ち上がる。	内外面ともナデ。内面は特に丁寧なナデ。	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	普通 普通	
109	SA12	土師器	高坏	全形	80%	口径 16.85cm 底径 11.05cm 器高 11.9cm	受部と杯部との境は若干屈曲。脚部はハの字状に開く。	内外面ともナデ。外面の一部にヘラナデ。	橙 5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元値	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
110	SA12	土師器	杯	全形	60%	口径(12.9cm) 器高 5.7cm	口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。底部は平底。	内外面ともナデ。	橙 5YR7/6 明黄褐 10YR7/6	橙 5YR7/6 明黄褐 10YR7/6	普通 普通	
111	SA12	土師器	鉢	全形	70%	口径 9cm 底径 4.1cm 器高 5.65cm	底部はやや挙げ底気味になる。	内外面ともナデ。	橙 7.5YR6/6 明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR6/6	普通 普通	
112	SA12	土師器	鉢	完形	90%	口径 (7.3cm) 底径 3.25cm 器高 7.35cm	平底を呈し、そのまま口縁へと至る。	内外面ともミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/4 橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4 黄橙 10YR8/6	普通 普通	
113	SA12	須恵器		胴部	10%以下			外面格子タタキ。内面不明。	灰白 N7/	灰 N6/	やや粗 普通	
114	SA12	須恵器	杯蓋	天井部	10%以下			外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰白 N7/ 灰 N5/	緑灰 7.5GY6/1	普通 良好	
115	SA12	須恵器		胴部	10%以下			外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰 N6/ 灰白 N7/	明オリーブ灰 2.5GY7/1	普通 良好	
116	SA12	須恵器		胴部	10%以下			外面平行タタキ。内面は当て具痕。	灰 N5/	緑灰 7.5GY6/1	普通 普通	
117	SA12	須恵器		胴部	10%以下			外面平行タタキ。内面は当て具痕のち一部ナデ。	暗灰 N3/	明緑灰 7.5GY8/1	やや粗 普通	
118	SA13	土師器	甕	胴部	10%以下		頸部はくの字状に強く屈曲する。	外面はハケメとナデ。内面はナデ。一部にハケメ。	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR7/8	普通 良好	
119	SA13	土師器	壷	頸部	10%以下		頸部はゆるく屈曲する。	外面は不明瞭。内面は板ナデの痕跡残る。	黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/4	普通 良好	
120	SA13	土師器	甕	口縁部	10%以下		頸部は強く屈曲し口縁部へと至る。	内外面ともナデ。	橙 2.5YR6/6	橙 5YR7/8	粗 普通	
121	SA13	須恵器	壷	口縁部	10%以下			内外面回転ナデ。	灰 N5/	灰 N5/	普通 良好	
122	SA13	土師器		底部	10%以下		わずかに平底を呈す。	外面は不明瞭。内面は板ナデ。	橙 5YR7/8	橙 2.5YR7/8	やや粗 普通	
123	SA13	須恵器		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面はナデ。	暗灰 N3/	灰 N5/	普通 普通	
124	SA13	須恵器		胴部	10%以下			外面は格子タタキ。内面は当て具痕をナデ消している。	灰白 2.5GY8/1	灰白 N7/	精良 良好	
125	SA15	土師器	甕	頸部～胴部	20%	胴部径(21cm)	頸部はゆるやかに屈曲。	内外面とも板ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 10YR8/6	普通 普通	
126	SA15	土師器	高坏	脚部	10%以下			外面はナデ。内面は板によるケズリ。	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	精良 良好	
127	SA15	土師器	高坏	脚部	20%		柱状部がゆるやかに屈曲し脚部へと至る。	外面はナデ。内面不明瞭。	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	普通 精良	
128	SA15	土師器	高坏	脚部	20%	底径(10.8cm)	柱状部が屈曲し脚部はハの字状に開く。	外面は摩滅激しい。内面はナデ。	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/8	普通 良好	
129	SA15	土師器	高坏	脚部	20%		柱状部はほぼ直立気味に立ち上がる。	外面はナデのちミガキ。内面不明瞭。	赤橙 10YR6/8 浅黄橙 7.5YR8/6	黄橙 7.5YR8/8	普通 良好	
130	SA15	土師器	高坏	脚部	20%	底径(11cm)	柱状部が屈曲し脚部はハの字状に開く。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	精良 良好	
131	SA15	土師器	高坏	脚部	20%	底径(11.9cm)	柱状部が屈曲し脚部はハの字状に開く。	内外面とも丁寧なナデ。	橙 2.5YR6/8 にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/4	精良 良好	
132	SA15	土師器		底部	10%以下		丸底を呈す。	内外面とも指ないしヘラナデ。	橙 5YR7/8	橙 5YR7/8	普通 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
133	SA15	土師器		底部	10%以下		丸底を呈す。	内外面ともナデ。	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	普通 普通	
134	SA15	土師器	杯	全形	70%	口径 12.4cm 底径 3.85cm 器高 6.3cm	口縁と胴部との境が不明瞭。平底を呈す。	内外面ともナデ。	橙 2.5YR7/8 にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR7/6	普通 普通	
135	SA16	土師器	甕	胴部	20%	胴部径(26cm)	胴部中央よりやや上が最大径となる。	摩滅激しいが、外面に一部にヘラ、板ナデの痕跡残る。	橙 5 YR7/8	橙 5 YR7/8	普通 やや不良	
136	SA16	土師器	高坏	脚部	10%以下		柱状部はエンタシス状に膨らみをもつ。	内外面ともナデ。	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/8	普通 普通	
137	SA16	土師器		底部	10%以下	底径(10cm)	平底を呈す。	内外面とも指オサエ。	浅黄橙 7.5YR8/4	褐灰 10YR4/1	普通 普通	
138	SA17	土師器	甕	底部	20%		丸底を呈す。	内外面とも板ナデ。内面の一部に指オサエ。	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 普通	
139	SA18	土師器	甕	口縁～胴部	20%	口径 20cm	口縁部は短く屈曲。胴部はやや長胴化を呈す。	内外面ともナデ。外面胴部にはハケメ。	にぶい赤褐 2.5YR5/4 にぶい橙褐 10YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/3 にぶい橙 5YR7/4	粗 良好	
140	SA18	土師器		底部	10%以下	底径(4cm)	平底を呈す。	外面はタタキ、ナデ。内面はナデ。	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR4/1	粗 良好	
141	SA18	土師器	高坏	脚部	10%以下			内外面ともナデ。	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	普通 普通	
142	SA18	土師器	高坏	脚部	10%以下			外面ナデ。内面は指ナデ。	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	普通 普通	
143	SA18	土師器	高坏	脚部	10%以下		柱状部が八の字に開き脚部へと至る。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/6	良好 良好	
144	SA18	土師器	高坏	脚部	10%以下			内外面ともナデ。外面一部に工具ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 良好	
145	SA20	土師器	甕	全形	80%	口径(23.1cm) 胴部径 24.2cm 器高 27.3cm	頸部の屈曲はゆるやか。	内外面ともナデ。	橙 5YR6/6 にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6	普通 良好	
146	SA20	土師器	甕	口縁～胴部	60%	口径 20.3cm 胴部径 21.6cm	頸部の屈曲はゆるやか。	内外面ともナデ。外面にはヘラナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3 橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好 良好	
147	SA20	土師器		底部	10%以下	底径(3.4cm)	わずかに平底を呈す。	外面は不明瞭。内面はヘラナデ。	灰白 5Y7/2 橙 2.5YR7/6	黄橙 10YR8/4	粗 普通	
148	SA20	土師器	甕	頸部～胴部	30%	胴部径 20.6cm	頸部は屈曲し、口縁部はやや直立気味に立ち上がる。	内外面ともに板ナデ。	橙 5YR7/8	橙 5YR7/6 橙 7.5YR7/6	普通 普通	
149	SA20	土師器		底部	10%	底径(4cm)	わずかに平底を呈す。	外面はタタキ、内面は指ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	灰白 10YR8/2	普通 普通	
150	SA21	土師器	甕	頸部～胴部	30%	胴部径 (23.6cm)	胴部は長胴化を呈す。	外面はハケメとナデ、内面はナデと指オサエ。	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4	普通 普通	埋甕
151	SA22	土師器	壺	頸部	10%以下		やや肩部が張る。	内外面ともナデと板ナデ。	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR6/8	普通 普通	
152	SA22	土師器	杯	口縁～胴部	20%	口径(15cm)	口縁端部が直立して立ち上がる。	内外面ともナデ。外面一部に板ナデ。	橙 5YR7/8	橙 5YR7/8	粗 普通	
153	SA22	土師器	杯	口縁～胴部	10%	口径(13.4cm)	口縁端部が直立して立ち上がる。	内外面ともナデ。外面一部に板ナデ。	橙 7.5YR7/6 橙 5YR7/6	橙 5YR6/6 橙 5YR7/8	普通 普通	
154	SA22	土師器		底部	10%以下	底径(5.2cm)	わずかに平底を呈す。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR4/2	粗 普通	
155	SA22	土師器	鉢	全形	100%	口径 5.5cm 底径 3.1cm 器高 5.9cm	平底を呈し、胴部はふみを帯びながら口縁に至る。	外面はミガキとナデ、内面はナデ。	明黄褐 10YR7/6 褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	普通 良好	小型土器
156	SA22	土師器	甕	全形	50%	口径(16.7cm) 器高 13.45cm	頸部はゆるやかに屈曲する。底部はほぼ丸底。	内外面とも板ないしヘラナデ。	橙 5YR7/6 灰黄褐 10YR5/2	にぶい橙 7.5YR6/4 橙 2.5YR6/6	普通 やや不良	
157	SA23	土師器	甕	口縁～胴部	20%	口径(21.3cm) 胴部径 21cm	頸部は屈曲し外傾しながら口縁部に至る。	内外面とも板ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元値	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
158	SA23	土師器	高坏	口縁～受部	40%	口径 19.9cm	口縁と受部との境が屈曲する。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	橙 7.5YR7/6 浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
159	SA24	土師器	甕	全形	60%	口径(16.2cm) 器高 21.4cm	頸部はなだらかに屈曲し口縁へ至る。底部は丸底。	内外面ともナデ。	橙 7.5YR7/6 橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4 橙 5YR6/6	普通 普通	
160	SA24	土師器	甕	口縁部	10%以下		頸部はなだらかに屈曲し口縁へ至る。	摩滅により不明瞭。	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR8/8	精良 普通	
161	SA24	土師器	模倣杯	全形	20%	口径(13cm) 器高 4.7cm	口縁と胴部との境が屈曲し、直立して立ち上がる。	外面は口縁部はナデ。内面はミガキ。	橙 2.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	普通 普通	
162	SA24	土師器	杯	口縁～底部	10%	口径(17cm)	口縁部は直立気味に立ち上がる。	外面口縁部はナデ。胴部はミガキ。内面はミガキ。	赤橙 10R6/8	赤 10YR5/6	精良 普通	
163	SA24	須恵器	杯蓋	全形	60%	口径(13.7cm) 器高 4 cm	天井部からなだらかに口縁部へと至る。	外面は回転ナデと回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	灰 5Y4/1	普通 普通	
164	SA24	須恵器	杯身	全形	30%	口径 12.3cm 器高 4.5cm	底部はやや平底を呈す。口縁部は短く内傾する。	外面は回転ナデと回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	精良 普通	
165	SA26	土師器	甕	口縁～胴部	30%	口径(21.7cm)	胴部は長胴化。	外面は口縁部ナデ。胴部ハケメ。内面はナデ。	橙 5YR6/6 灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/4	普通 普通	
166	SA28	土師器	甕	底部	20%		丸底を呈す。	外面はナデのちミガキ。内面はナデ。	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	普通 普通	埋甕
167	SA30	土師器	甕	胴部～底部		胴部径(25cm)	丸底を呈す。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	精良 精良	埋甕
168	SA30	土師器	高坏	口縁部	10%以下	口径(19.4cm)		不明瞭。	浅黄橙 7.5YR8/6 橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	精良 普通	
169	SA30	土師器		底部	10%以下	底径(11cm)	平底を呈す。	内外面とも回転ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	にぶい橙 7.5YR7/4	普通 普通	
170	SA30	土師器	椀	底部	10%以下	底径(7 cm)		内外面とも回転ナデ。底面に指	橙 2.5YR7/8 浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6 橙 2.5YR7/6	普通 普通	
171	SA30	須恵器	坏蓋	天井部	10%以下			外面は回転ナデと回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。一部ボタン定ナデ	灰 7.5Y6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	精良 普通	
172	SD 1	土師器	椀	口縁～胴部	10%以下	口径(14cm)		内外面とも回転ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	黄橙 10YR8/6	精良 普通	
173	SD 1	土師器	椀	底部	10%以下	底径(9 cm)		内外面とも回転ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/6	褐灰 10YR4/1	精良 普通	
174	SD 1	土師器	皿	全形	10%以下	口径(7.6cm) 器高 1 cm		内外面とも回転ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	普通 普通	
175	SD 2	土師器	椀	全形	40%	口径(12.7cm) 底径 7.15cm 器高 4.2cm	胴部はなだらかに口縁部へと至る。	内外面とも回転ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	普通 普通	
176	SD 2	土師器	皿	全形	100%	口径 8.35cm 底径 6.2cm 器高 2.3cm		内外面とも回転ナデ。底部切り離しは糸切り。	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y5/1	普通 普通	
177	SD 2	土師器	皿	全形	100%	口径 8.6cm 底径 6.3cm 器高 2 cm	口縁端部を丸くおさめる。	内外面とも回転ナデ。底部切り離しは糸切り。	灰 N4/	灰 N4/	普通 普通	
178	SD 2	土師器	椀	底部	20%	底径 7 cm		外面は回転ナデ。内面不明瞭。	浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	普通 普通	
179	SD 3	土師器	甕	口縁～胴部	20%	口径(28cm)	頸部の稜線は不明瞭。	内外面ともナデ。	黄橙 10YR8/6 褐灰 10YR5/1	黄橙 7.5YR8/8	普通 普通	
180	SD 3	土師器	甕	口縁～頸部	10%以下	口径(22cm)	頸部の稜線は不明瞭。	内外面ともナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 10YR8/6	普通 普通	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						( ) は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
181	SD3	土師器	甕	口縁部	10%以下	口径(24cm)	口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。	内外面ともナデ。	橙 5YR7/8 灰黄 2.5Y6/2	明黄褐 10YR7/6	普通 普通	
182	SD3	土師器	甕	口縁～胴部	10%以下	口径(17cm)	頸部の稜線は不明瞭。口縁部は外反しながら立ち上がる。	内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/4	淡黄 2.5Y8/4	粗 普通	
183	SD3	土師器	高坏	口縁部	10%以下		口縁部と受け部との境がない。杯部は丸みを帯びる。	内外面とも板ナデ。	橙 7.5YR7/6 黄橙 7.5YR8/8	橙 2.5YR6/8	普通 普通	
184	SD3	土師器	甕か壺	底部	10%以下		わずかに平底を呈す。	内外面とも板ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 2.5Y7/3	粗 良好	
185	SE1	弥生土器	甕か壺	底部	10%以下	底径(9.4cm)	平底を呈し、底面には木の葉痕が残る。	外面はナデ、内面は摩滅により不明瞭。	黄橙 10YR8/6	褐灰 10YR5/1	精良 普通	
186	SE1	土師器	甕	口縁部	10%以下	口径(22cm)	口縁部は短く強く屈曲し、外傾しながら立ち上がる。	外面口縁部はヨコナデ。胴部板ナデ。内面はヨコナデ。	橙 5YR 7/8 黄橙 10YR8/6	黄橙 7.5YR8/8	普通 良好	
187	SE1	土師器	甕	胴部～底部	10%以下			内外面ともヘラなしし板ナデ。	橙 5YR 7/8	橙 5YR7/8	粗 普通	
188	SE1	土師器	皿	口縁～底部	15%	口径(16cm) 器高 2 cm	底面の切り離しはヘラオコシ。	内外面とも回転ヘラケズリの ち回転ナデ。	黄橙 7.5YR7/8	橙 7.5YR7/6	粗 良好	
189	SE1	土師器	皿	全形	60%	口径 17.7cm 器高 2.1cm	底面の切り離しはヘラオコシ。	内外面とも回転ナデ。	黄橙 7.5YR8/8	黄橙 7.5YR8/8	普通 普通	
190	SE1	須恵器	杯蓋	天井～口縁部	10%以下		天井部と口縁部との境に段を設ける。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰N4/	灰N5/	普通 普通	
191	SE1	須恵器	杯身	口縁部	10%以下		口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	オリーブ灰 5GY6/1	オリーブ灰 5GY6/1	普通 普通	
192	SE1	須恵器	甕	頸部	10%以下		頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。	外面は回転ナデ。内面は回転ナデと同心円状の当て具痕。	暗灰N3/	明オリーブ灰 2.5GY3/1	やや粗 普通	
193	SE1	須恵器		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は同心円上の当て具痕。	灰N6/	オリーブ灰 2.5GY6/1	普通 普通	
194	SE1	須恵器		肩部	10%以下		自然釉がかかる。	外面は平行タタキ。内面は同心円上の当て具痕。	オリーブ黄 7.5GY6/3	オリーブ灰 5GY6/1	普通 普通	
195	SE2	須恵器		胴部	10%以下			内面はナデ。	明黄灰 2.5GY4/2	緑灰 10GY5/1	普通 普通	
196	SE2	須恵器		胴部	10%以下			外面は格子タタキ。内面は当て具痕をナデ消し。	灰N4/	灰白N7/	普通 普通	
197	SE2	須恵器		胴部	10%以下			外面は平行タタキ。内面は同心円の当て具痕。	暗灰N3/	灰 6/	普通 普通	

第６章　考察とまとめ

第１節　上薗遺跡Ⅰ地区の遺構と遺物について

１．竪穴住居址

今回の調査区では30軒の竪穴住居址を検出した。埋甕や主柱穴のみの検出もあるが、概ね方形プランで、４本柱であることが多い。規模は床面積10㎡に満たない小型のものから50㎡を超えるものまであり、小型のものほど主柱が確認できない場合が多い。埋甕は８軒から確認され、SA11からは２基の埋甕が並ぶようにして検出されている。竈は２軒から確認されている。

出土遺物は土師器が中心で須恵器が若干混じる。県内の古墳時代以降の土師器について検討した今塩屋毅行・松永幸寿によると全10期に区分が可能という（註１）。今回の調査区で検出された住居址は遺構上面の攪乱が激しくまた、他の遺構との切り合いも多いことから、同一住居内からの出土であってもかなりの個体差があり一括性を認定するのは困難であるが、甕や高坏といった出土量の多いもののセット関係から表３のとおり時期を設定した。これによると今塩屋・松永編年の３期（TK73～TK216型式併行期）が１、４期（TK208～TK23）が３、５期（TK47～MT15型式併行期）が４、６期（TK10～MT85型式併行期）が０、７期（TK43～TK209型式併行期）が４、８期（TK217型式併行期）が３、古代以降が３となっている。６期にいったん築造が途絶えるのは興味深い。また、埋甕は５期から登場するが、SA21やSA26から出土している甕は長胴化が進み、ハケ目調整を施している。色調は赤褐色で、在地土師器と比べて異質なものであることから外部からの流入品である可能性もある。類似する資料が西都市の宮ノ東遺跡で出土している。時期については諸説あるが、８世紀代まで下る可能性がある（註２）。竈は７期から登場する。

このほかSA５からは土師器皿と椀が出土している。ほとんどが底部ヘラオコシだが、62のみ糸切り痕が確認されている。日向地方における糸切り技法の導入は12世紀中頃と想定されていることから（註３）、SA５もこの時期と考えたい。

２．掘立柱建物

17軒検出した。北区から検出された建物群は柱穴の堀方が大きく、柱跡痕が残っているものが多い。また、主軸の方角が近似しているSB１、SB２、SB３、SB４は遺構同士が重なっておらず、一定の間隔をもって建てられていることから、同時期に存在していた可能性がある。南区では柱穴の堀方が小さいものが多い。主軸の方角はSB８、SB11、SB12、SB13、SB14、SB15がほぼ同方位である。ただしSB10とSB11、SB12とSB13は重なりあっている。出土遺物に乏しく時期比定が困難だが、北区の建物群は古代、南区は中世の可能性が高い。

３．土坑

土坑は全部で10基確認された。このうち出土遺物から時期特定が可能なのはSD１～３である。SD１からは土師器椀や小皿が出土している。いずれも小片だが173と174は底部切り離しがヘラオコシである。椀の形態や南九州における小皿の出現が11世紀前後と考えられることから、11世紀頃と考えたい（註４）。SD２からも土師器椀や小皿が検出されている。底部切り離しはヘラオコシが多いが、176の小皿のように糸切底が確認されること

からSA５と同様12世紀中頃から13世紀頃と思われる。SD３からは古墳時代の土師器甕や高坏が出土している。甕の形態は今塩屋・松永編年の４期に相当する。また、SD９は平面が長方形を呈し、長軸側の壁際沿いには幅20～40cm、深さ10～12cmの掘り込みがある。遺物が出土しなかったため時期が特定できなかったが、弥生時代後期から古墳時代初頭の土坑墓195基が検出された川床遺跡に類似した遺構があることから、SD９も弥生時代の土坑墓の可能性がある。

第２節　上圃遺跡集落の展開について

上圃遺跡ではこれまでの調査で表４にあるとおり332軒もの竪穴住居が確認されている。このうち出土遺物から時期比定が可能なものは54軒である。これを先ほどの今塩屋・松永編年に照らし合わせると、２期が１、３期が４、４期が13、５期が11、６期が５、７期が12、８期が３、であと古代が４である。このことから古墳時代中期初頭から前半には集落の形成が始まった可能性が高い。また、４～５期にかけては一度ピークを迎え、６期になると一時的に減少する。そして７期に再び住居数が増加し、８期以降は衰退するようだ。これ以降の時期ついては掘立柱建物や溝状遺構の時期が明確でなくまた、報告された竪穴住居址の数が全体の１／４に満たないことから判然としないが、今塩屋・松永編年の10期に該当する住居が確認されていないことや、今回報告されたⅠ地区のSA５の住居址から出土している土師器の時期が12世紀中頃以降と考えられていることから、古代以降は集落の規模が著しく縮小し、一時的な断絶期があった可能性が高い。また、６期に住居数が減少するが、これは上圃遺跡だけでなく、大淀川、一ツ瀬川流域全体でみられる現象である。

時期比定な可能な住居の数が、調査総数の１／６であることや、発掘調査面積が遺跡全体の２～３割程度であることから、上圃遺跡では最盛期には100軒以上の住居が同時期に形成されていた可能性が高い。

第３節　周辺遺跡との関係について

上圃遺跡周辺には、古墳時代のさまざまな墓制が展開しており、集落と墓制との関係を検討するうえで重要な地域である。ここでは周辺墓制との関係について検討してみたい。

鐙遺跡では３基の円墳が確認されている。２条鉢巻き状の葺石をもち、うち１基からは蛇行剣や圭頭形鉄鏃が出土している。蛇行剣は日向地方で数多く出土し、そのほとんどが古墳時代中期前半に集中していることや、圭頭鏃の型式が典型的な長頸鏃導入以前のものであることから、鐙古墳は古墳時代中期前半から中葉築造の可能性が高い。

三納代古墳群太郎兵衛迫支群は鐙遺跡の北側の丘陵上に位置する。径10～14mの円墳９基が確認された。いずれも主体部の調査例はないが、確認調査の結果いずれの古墳も葺石を有していることが分かった。一般的にこの地方では古墳時代後期になると、古墳の形や規模に関係なく葺石を施さなくなることから、これらの円墳群は中期以前に築造された可能性が高い。古墳群も狭い丘陵上に一定の間隔をもって立地していることから初期群集墳の様相を示している。

三納代古墳群蔵園支群では墳丘が消滅し、周溝のみが確認された消滅墳が12基検出された。周溝内から出土した須恵器はTK10型式からTK209型式併行期に相当する。また地下式横穴３基が確認されている。うち３号から隼人りⅠ～Ⅱ型式の須恵器が出土している。

表3　上園遺跡住居一覧

№	住居番号	規模		平面形	主柱	埋穏	竈	時期	備考
		長軸× 短軸(m)	面積(㎡)						
1	B－1	6.72× 6.40	43	方形	4	1		8～9期	
2	B－2	6.48× 5.72	37	方形	4			6～7期	
3	B－3	4.88× 5.04	24.59	方形	4			7期	
4	B－4	6.66× 5.76	38.36	方形	4			6期	土抗2基
5	B－5	－	－	－	－	－	－	－	－
6	B－6	－	－	－	－	－	－	古代	－
7	B－7	－	－	－	－	－	－	不	－
8	B－8	5.44× 4.80	26.11	方形	4	1		7期	
9	B－9	5.28×	－	方形	4？			不	
10	B－10	6.40× 5.52	35.32	方形	4			不	
11	B－11	4.80× 4.20	20.16	方形	4？			4期	
12	B－12	8.80× 6.80	59.14	長方形	－			8期	
13	B－13	－	－	－	－	－	－	－	－
14	E－1	5.8× 4.15＋α	(33.6)	－	－			4期	
15	E－2	5.77× 5.75	43.7	方形	4			4～5期	
16	E－3	4.00× 1.81＋α		方形	－			不	
17	E－4	6.67× 6.36	42.4	方形	9			4期	
18	E－5	5.29× 5.18	27.4	方形	4			7期	
20	E－7	5.04× 4.35＋α	(25.4)	方形	4			7期か	
21	E－8	6.24× 5.34	33.3	長方形	4			5期	
22	E－9	6.30× 1.50＋α	(39.7)	長方形	4			5期	
23	E－10	6.20× 2.30＋α	(38.4)	長方形	2？				
24	E－11	5.61× 5.28	29.6	方形	4				
25	E－12	5.84× 3.90	22.8	長方形	4			4期か	
27	E－14	5.66× 5.04	28.5	長方形	4			5期	
28	E－15	5.50× 4.96	27.3	長方形	4			不	
29	E－16	5.97× 4.77＋α	(35.6)	長方形	－			6期	
33	E－20	7.25× 7.1	51.5	方形	4			3～4期	
34	E－21	4.69× 4.49	21.1	方形	4	1		不	
35	E－22	3.10× 3.10	(9.6)	方形	－			不	
36	E－23	3.72× 3.32	12.4	方形	－			4期	
37	E－24	4.65× 4.64	21.6	方形	4				
38	E－25	3.46× 3.04	10.5	方形	－			3期	
39	E－26	6.17× 6.09	37.6	－	4				
40	E－27	5.40× 3.68＋α	(29.2)	－	4				
41	E－28	7.75× 7.15	55.4	－	4			4期	
43	E－30	6.07× 5.50	33.4	－	4				
45	E－32	3.35× 3.44＋α	(11.4)	－	－				

№	住居番号	規模		平面形	主柱	埋甕		時期	備考
		長軸× 短軸(m)	面積(㎡)						
46	E－33	8.25× 7.76	64.0	－	4				
47	E－34	5.00× 4.90	24.5	－	4	1		6 期	
48	E－35	3.13× 2.97	9.3	－	4				
49	E－36	5.47× 3.87＋α	－	－	4				
50	E－37	4.52× 3.83	－	－	4			5 期	
51	E－38	5.60× 5.50	30.8	－	4			4 期	
52	E－40	6.62× 6.37	42.2	－	4			3 期	
53	E－41	6.36× 2.24＋α	(40.4)	－	2？				
54	E－42	4.41× 3.70＋α	(19.4)	－	4				
55	E－43	6.34× 6.34	(40.2)	－	4		○	7期	
56	E－44	3.33× 2.99	10.0	－	－				
57	E－45	8.71× 8.33	72.5	－	8				
58	E－46	5.26× 5.26	(27.7)	－	－				
59	E－47	7.43× 6.88＋α	(55.2)	－	8				
60	E－48	8.01× 7.70	61.7	－	－				
61	E－49	6.70× 6.50	43.6	－	－				
62	E－51	－	－	－	－	1			
63	E－52	3.08× 2.89	8.9	－	3？		○		
64	E－53	4.42× 4.12	18.3	－	4			7－8 期	
	E－54	－	－	－	－			4期	
66	E－55	3.98＋α × 3.90	15.2	－	2？				
67	E－56	5.58× 3.88	21.7	－	－				
68	E－57	6.36× 5.81	37.0	－	4				
69	E－58	5.49× 4.86	26.7	－	4	1			
70	E－59	3.90× 3.66＋α	(15.2)	－	－				
71	E－60	5.60× 3.72＋α	(31.2)	－	－				
72	E－61	3.51× 2.92	10.2	－	－				
73	E－62	3.10× 3.01	9.3	－	－		○		
74	E－65	－	－	－	－	1			
75	E－66	4.40× 4.30	18.9	－	4		○		
76	E－67	6.57× 5.21	34.2	－	4				
77	E－68	3.85＋α × 2.65＋α	(10.2)	－	－			6期	
78	E－69	－	－	－	－				
79	E－70	3.25＋α × 2.65＋α	(8.3)	－	－		○		
80	E－71	7.16× 6.45	46.2	－	8	1			
81	E－72	6.93× 4.52＋α	(48.0)	－	6				
82	E－73	7.85× 6.56	51.5	－	8				
83	E－74	5.71× 5.35	30.5	－	4				
84	E－75	3.67× 4.67＋α	(13.5)	－	4				

№	住居番号	規模		平面形	主柱	埋甕	竈	時期	備考
		長軸× 短軸(m)	面積(㎡)						
85	E－76	5.97× 5.76	34.4	－	4				
86	E－77	3.95× 3.40	13.4	－	－				
87	E－78	4.00＋α × 2.50＋α	(16.0)	－	－				
88	E－79	1.99＋α × 1.61＋α	(4.0)	－	－				
89	E－85	－	－	－	－				
90	E－86	－	－	－	－				
91	E－87	4.35× 3.90	17.0	－	－				
92	E－88	3.50× α	(12.3)	－	－				
93	E－89	4.65＋α × 2.90＋α	(21.6)	－	－				
94	F－1	4.71× 5.22	24.78	方形	4			5期	
95	F－2	3.52× 3.44	10.59	方形	－		1		
97	F－4	5.32× 3.92	20.85	長方形	4	1		5期	
98	F－5	5.90× 5.62	29.64	方形	4			4～5期	
99	F－6	3.54× 3.20	9.14	方形	2？			不	
100	F－9	4.74× 4.44	19.71	方形	4			5期	
101	F－10	5.00× 4.92	21.92	方形	4？			2～3期	
102	F－11	5.72× 5.70	29.62	不明	－				
103	F－12	6.45× 6.20＋α	34.25	方形	4？				
104	F－13	5.84× 5.32	29.97	方形	4	1			
105	F－14	4.50× 3.50	12.35	方形	2				
106	F－15	8.10× 7.10	52.86	不正方形	－	1			
107	F－16	4.67× 5.21	19.84	方形	－				
109	F－18	6.35× 5.80	32.4	方形	4	1			
110	F－19	7.14× 6.52	43.46	方形	4				
111	F－20	－	－	方形？	－				
112	F－21	－	－	方形？	－				
113	F－22	－	12.54	方形？	－				
114	F－23	－	－	方形	－				
115	H－2	－	－	－	－				
116	H－11	－	－	－	－				
117	H－12	－	－	－	－				
118	H－24	－	－	－	－				
119	H－33	－	－	－	－				
120	H－34	－	－	－	－				
121	I－1	－	－	－	－			4期	
122	I－2	－	－	－	－			4期	
123	I－3	4.80× 4.70	22.56	方形	－			5期	
124	I－4	5.00× 4.80	24	方形	－	1		5期か	
125	I－5	3.90× 3.50	13.65	方形	－			古代	土抗

№	住居番号	規模		平面形	主柱	埋穂	竈	時期	備考
		長軸× 短軸(m)	面積(㎡)						
126	Ⅰ- 6	3.90× 3.50	13.65	方形	-		○	7 期	
127	Ⅰ- 7	3.30× 3.10	10.23	方形	-		○	-	
128	Ⅰ- 8	5.80× 5.80	33.64	方形	4			-	
129	Ⅰ- 9	6.10× 4.80	(29.28)	不定長形	4			7期	
130	Ⅰ- 10	4.80× 4.60	22.08	方形	4	1		-	
131	Ⅰ- 11	-	-	-	-	2		-	
132	Ⅰ- 12	5.00× 4.90	24.5	方形	4			7 ~ 8 期	
133	Ⅰ- 13	7.80× 6.90	53.82	長方形	2 +			-	
134	Ⅰ- 14	4.60× 4.30	(19.78)	方形	4			-	
135	Ⅰ- 15	5.40× 4.80	25.92	長方形	4			5 期	
136	Ⅰ- 16	5.70× 5.50	31.35	方形	4			-	
137	Ⅰ- 17	-	-	-	-	1		-	
138	Ⅰ- 18	7.80× 7.60	59.28	方形	4			7 期	
139	Ⅰ- 19	3.00× 3.30	9.99	方形	-			-	
140	Ⅰ- 20	5.00× 4.70	23.5	方形	4			4 期	
141	Ⅰ- 21	2.8 + α × 2.8 + α	(7.84)	方形	-	1		8 世紀か	
142	Ⅰ- 22	-	-	-	4			5 期	
143	Ⅰ- 23	7.0 0 + α × 7.0 0 + α	(49.0)	方形	-			3 期	
144	Ⅰ- 24	5.70 + α × 5.70 + α	(32.49)	方形	4			7 期	
145	Ⅰ- 25	4.50× 4.40	(19.8)	方形	4			-	
146	Ⅰ- 26	3.05× 2.50	(7.62)	不定方形	-	1		8 世紀か	
147	Ⅰ- 27	4.05× 3.20	12.96	方形	-			-	
148	Ⅰ- 28	-	-	-	-			-	
149	Ⅰ- 29	3.10× 2.90	(8.9)	方形	-	1		7 ~ 8 期	
150	Ⅰ- 30	6.00 + α × 6.00 + α	(36.0)	方形	2 +	1		8 期か	

表4　上圏遺跡既往の調査概要

調査区	面積（㎡）	遺構				調査年度	備　考
		竪穴住居	掘立柱建	土抗	溝状遺構		
A・C地区	1,408	45	2	6	7	S.61	未報告
B地区	883	13	3	1	2	S.61	1/3 のみ報告 第19集
D地区	4,000	98	3	2	6	S.62	
E地区	3,000	89	4	2	6	S.62	第19集　第23集
F地区	2,776	23	10	1	16	S.62	第18集
G地区	約1,000	2				S.62	未報告
H地区	1,600	32	5	7		S.62	未報告
I地区	6,000	30	17	10	2	H.9	第56集
計	20,667	332	44	29	39		

隅ヶ迫横穴墓群は上園遺跡のある台地上から東側に派生した丘陵上に位置する。６基の横穴墓が調査された。出土須恵器などからTK43型式から隼上りⅢ型式併行期にかけて築造されていたと考えられる。

比良横穴墓群は上園遺跡の南側の丘陵上に位置する。３基の横穴墓が確認された。TK209型式から隼上りⅡ型式併行期の築造と考えられる。

以上のことから上園遺跡周辺で最も古い古墳と考えられる鐙古墳と上園遺跡の集落の形成は、ほぼ同時期か集落の形成が若干早い可能性が高い。また横穴墓などの後期群集墳が衰退する隼上りⅢ型式併行期以降は、集落も著しく縮小していったと考えられる。

第４節　まとめ

上園遺跡Ⅰ地区では30軒の竪穴住居址のほか、掘立柱建物群や土抗、溝状遺構を検出した。調査区が遺跡内の最も南側に位置することから集落の南限を概ね特定することができた。先述したとおり上園遺跡は、古墳時代における土師器編年や住居の構造、周辺に展開する古墳群との関連を検討するうえで、重要な遺跡である。しかし今回の調査区は遺構上面の攪乱が激しく、同一遺構内での遺物の一括性を認定するのが困難であった。また、遺物そのものの量もこれまでの調査と比べると少なかった。上園遺跡全体をみても報告されているのは、４分の１以下に過ぎず、集落の全体像を解明するには至っていない。未報告調査区については早急に対策を検討したい。

【註】

1）今塩屋毅行・松永幸寿 2002 「日向における古墳時代中期～後期の土師器－ 宮崎平野部を中心として」 古墳時代中・後期の土師器－ その編年と地域性　第５回九州前方後円墳研究会実行委員会

2）今塩屋毅行 2009「日向国における奈良時代土器の一様相　―宮崎県西都市宮ノ東遺跡の調査から―」平成21年度九州考古学会総会発表要旨

3）岡本武憲 1995「九州南部」 概説中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編

4）注３と同じ。

1. SA1

2. SA2

3. SA3

写真図版2

1. SA4

2. SA5

3. SA6

1. SA7

2. SA8

3. SA9

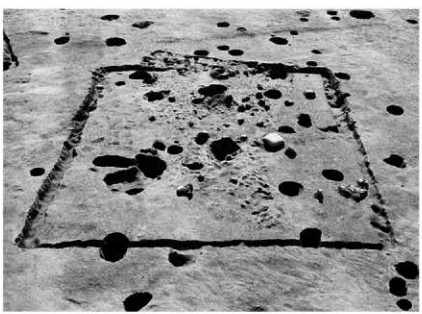
写真図版4

1. SA10

2. SA11とSD7

3. SA12

1. SA14

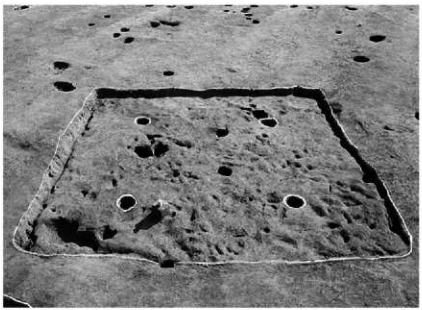


2. SA15

3. SA16

写真図版6

1. SA18とSA19

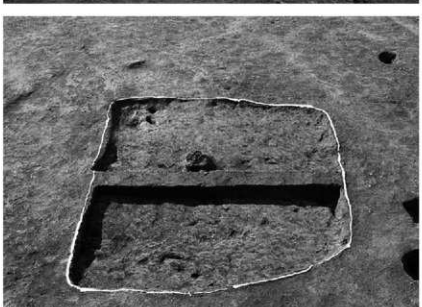


2. SA20

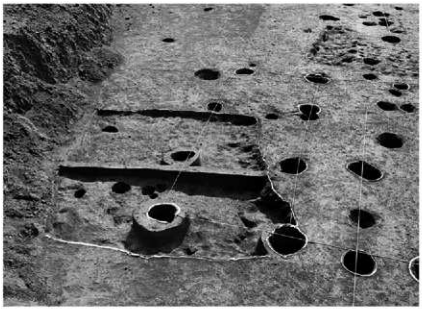
3. SA21

1. SA22

2. SA23とSA24



SA26



1. SA27とSB11

2. SA29とSB8

3. SA30

1. SA11 埋甕

2. SB2

3. SB4 とSB5

1. SB6

2. SB7

3. SB9

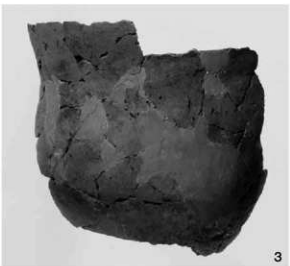
1. SB14

2. 南区の建物群

3. SE2

1

2


3

4

5

6

7

8

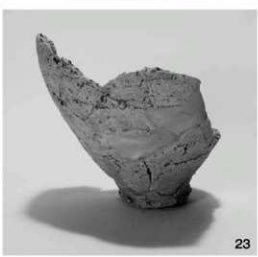
9

10

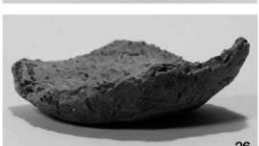
16

18

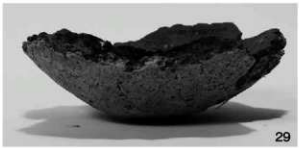
21.22


23

24


26

27


29

30

32

33

34

35

36

38

40

37

41

43

45

46

47

48

49

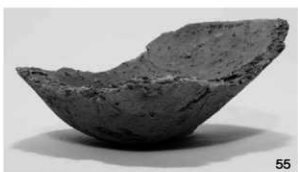
51

50

52

53

54

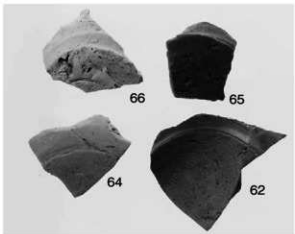

55

56

58

57

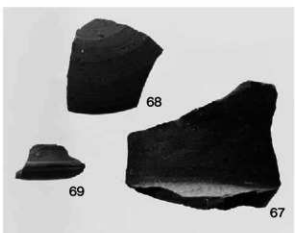
60


66
65
64
62

61

63

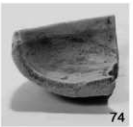
70

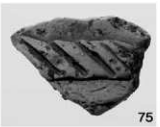

68
69
67

71

72

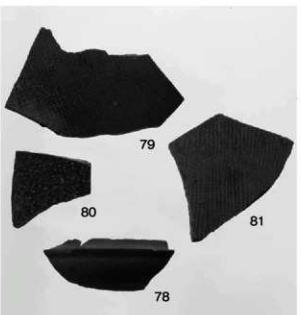
73


74


75

77

76


79
80
81
78

82

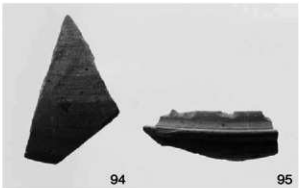
88

85

89

92

91


94 95

97

102

105

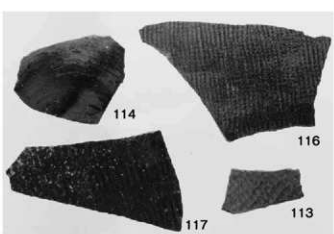
107

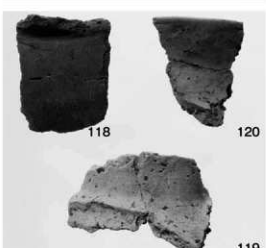
108

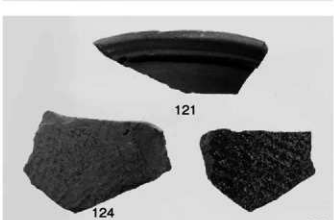
109

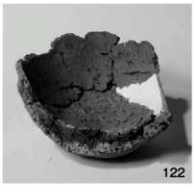
110

112








122

126

127

128

130

139

131

138

134

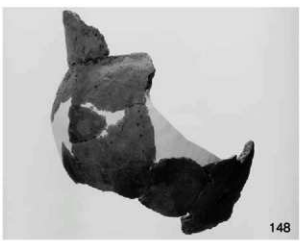
142

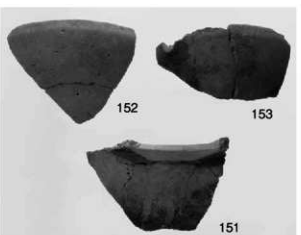
143

144

145

146

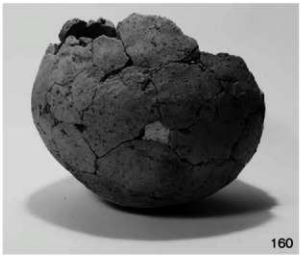

148


152
153
151

155

158

156


160

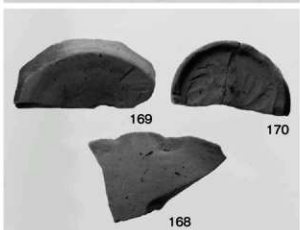
161

162

163

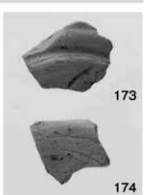
164

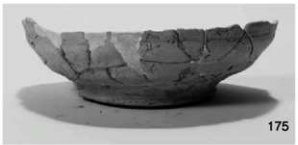
165


169
170
168

166

171

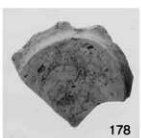

173
174

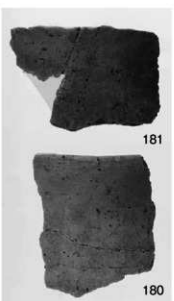

175

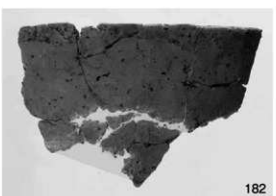
176

177

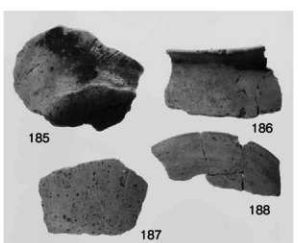
176
177


178

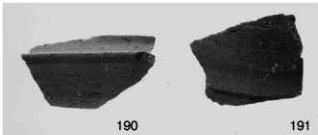

181
180


182

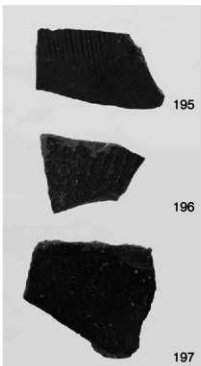
183


185
186
188
187

189


190 191

192


195 196 197

194

報告書抄録

ふりがな	うえぞのいせきあいちく
書名	上園遺跡Ⅰ地区
副書名	個人農地土壌改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	55
編著者名	樋渡　将太郎
編集機関	新富町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行年月日	平成22年２月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上園遺跡Ⅰ地区	みやざきけんこゆぐんしんとみちょうおおあざひおきあざきたばるまきほか 宮崎県児湯郡新富町大字日置字北原牧ほか	47	4020			19971001 ～ 19971230	6,000㎡	土壌改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上園遺跡Ⅰ地区	集落	古墳時代 古中世	竪穴住居 掘立柱建物 溝状遺構 土抗 柱穴	土師器・須恵器	古墳時代中期から古代にかけて宮崎県内最大規模の集落

新富町文化財調査報告書　第55集

上薗遺跡Ⅰ地区

個人農地土壌改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　２０１０年２月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　(株)印刷センタークロダ